

FateHF.Normal√ × FateG0 AD.2004? 幻想逃避都市冬木

ありやりやぎ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人理修復の旅の果て。多くの出会いと別れを経て、数日後に解体の日を迎えるはずのカルデア。そこで最後の特異点が観測される。場所は、始まりの場所冬木。彼らがたどり着いた先にあったのは、燃え盛る戦場でも荒廃した都市でもなく、何の変哲もない穏やかな日常だった。

夢想の中へと沈んだ少女を救うべく、チームカルデアは偽りの街で昼と夜とを駆ける。

これは、救われた少女の嘆き――

――そして今一度、正義の味方が立ち上がる。

## 目次

プロローグ	それはあり得たかもしれない世界	1
ep 1	偽りの平穩	6
ep 2	剥がれ落ちた日常	15
ep 3	夢から目覚めて	26
ep 4	十年後の顛末	35
ep 5	槍兵とそのマスターと	42
ep 6	ある主従の決着	51
ep 7	在りし日の友よ、今は	58
ep 8	敗走、そしてこれから	66

## プロローグ それはあり得たかもしれない世界

「——ばい。先輩!!」

凜とした少女の声だ。かつての頼りなさはもはやなく、たおやかでありながら芯のある自慢の“後輩”の声だ。

「あ、あの、どうしてそんなに満たされた顔を……。と、とにかく起きてください先輩」

今まで沢山の敵と戦ってきた身ではあるけれど、朝の微睡はそれ以上の強さだと思う。朝の穏やかな陽ざしに温いお布団、そして耳ざわりの良い彼女の声。こんな勝てっこないよなあ。

「フオウフオ——ウ」

「むぐつ」

我ががマスコットのフオウ君のお尻が、顔に乗ってきた。ううん、これは流石に息苦しいや。

いい加減に、むくりと起き上がった。

「もう、どうしたんだよ、マシユ。今日は別にレイシフトの予定もなかったじゃないか」

だから、もう少し寝かせてくれよ。そう言おうとして、

——れいしふと……?」

痛烈な違和感。わからない。わからないけれど、何か大事なことを僕は忘れている。

周囲を見渡す。

障子に畳。今寝ているのは敷布団で、部屋にはいくつも見覚えのあるようなないような私物がいくつか。そして、耳をすませば鳥のさえずりが聞こえるのだ。

無機質な白の部屋ではない。彼らから貰った旅の思い出の品々なんてない。窓の外に白い氷の世界が広がっていることもない。

それは失われた日常の一コマ。取り戻すべき暖かな人の営み。何でもない過ぎ去るだけの、けれど掛けがえのない日々のなかのワン

シーン。だというのに、どうしてこんなにも違和感があるんだ……？  
「れいしふと？ 何か変な夢でも見たのですか？ もう、先輩はどうやらまだ寝ぼけているみたいですね」

「え……？」

違う。おかしい。何がおかしいのか分からないけれど、でも彼女がその言葉を知らないことは決してあり得ない……はずだ。否、いつそ知らないでいた方が幸せなのだろうか。

「ささ、先輩。顔を洗ってさっぱりしましょう。今なら、もう洗面所を使っている人もいないでしょうし」

「え、いや、だって。今日は」

なおももたつく僕を無理やりに起こした彼女は、そのまま僕の背中を押していった。

部屋を出ればすぐに渡り廊下だった。いや、これは縁側という言葉の方がしっくりくる。そこから見えるのは広い庭。そしてポツンと建った、立派な土蔵があった。

どうやら今僕が寝泊まりしている場所は、由緒正しそうな武家屋敷のようだ。

——なんだろう、どこかで見たような——

それは、在りし日の記憶の残滓。眉間にしわを寄せてばかりの、思いつきぬ誰かとともに駆け抜けた戦場の一瞬。

「いや、そんなはずはないか」

急速に明瞭になりだした頭で、妄想を振り払う。そんなはずはない。だって僕がここに来たのは高々一か月ほど前の出来事だ。

「あら？ 今起きたの？」

マシユに手を引かれながらの長い廊下を歩いていると、背中からそんなふうな声をかけられた。

「ああ、はい。ちよつと寝坊しちゃって——」

振り向いた先に、鮮烈な赤。

長く艶やかな黒髪をツインテールに纏め、高校指定の制服の上に真

赤のコートを羽織った少女がいた。チエシヤ猫のような目、華奢な体軀でありながら強い意志を秘めた瞳。

それは、正しく金星の女神。古代メソポタミアにて美と戦争を司る、神々に愛された娘。バビロニアにて出会った一柱の女神。善性でありながら、人々を振り回すお騒がせなああの女神の名は――

「ああ、おはようございます。凜さん」  
りん？

「はいはいおはよう。相変わらず礼儀正しいわね、マシユは。それに比べて藤丸君ときたら」

「先輩は寝るのが大好きですからね。ある時は立ったまま寝てしまうくらいなのです」

「うへえ、筋金入りだ。一度見てみたいものね」

彼女たちの声が遠く聞こえる。何だ？ 僕はいったい何を思い出そうとしていた？

「大丈夫ですか、先輩？」

マシユが僕の顔を覗き込む。長いまつげまで鮮明に見える距離にドギマギして目をそらした。まったくまったく、マシユったら自分の容姿に無頓着なんだから。

「だ、大丈夫だよ。ちよつとまだ寝ぼけているだけだから」

「全く、藤丸君いい加減しつかりなさい。今日から学校なのよ？」

その猫のような釣り目に呆れを映して彼女は言った。なんだよ、遠坂さんだって朝は激弱なくせに。

「わかつてるよ、遠坂さん」

脳裏にちらつく違和感を押し除ける。もう大丈夫だからと、二人を先に行かせて、僕は洗面台で顔を洗うことにした。制服に着替えて、鏡でさきつと髪型をチェックしたら朝食だ。

居間に入ると、すでに何人か先客がいた。

「おっはよー、藤丸君!! 今日も一日頑張っていこーぜっ!!」

シュビ!! シュバ!! と無駄な効果音を自分の口で言いながら現れたのは、僕らのクラスの担任にしてこの家の家主の後見人。オレンジ色が良く似合う、元気ハツラツな女教師だ。

「おはようございます。ジャガー……じゃなくて、藤村先生」

「ジャガー!? 違うぜ、アタシは冬木の虎さ。タイガーさ!! ってタイガーって呼ぶなー!!」

「り、理不尽な怒り……」

相変わらず元気な人だ。でも朝からこれは、いろいろすごいな。

「藤村先生、それぐらいにして落ち着いてください。そんなに暴れちゃうと埃が舞って朝ごはんにかかっちゃいますから」

そう、藤村先生を諭すのは、ふんわりとした声。藍色の髪を靡かせる女性らしい体つきの、マシユと同じく後輩属性を持つ少女。それこそ、桜が似合うような、儂げな少女だった。

「ああ、パー——」

「パー?」

「——じゃなくて。間桐さん、おはようございます」

「はい、おはようございます。藤丸さん」

騒がしい女教師に、儂げな少女。二人に迎えられ、しばし歓談にふける。といっても朝のこの時間に話し込むようなこともない。台所からこぼれる匂いを嗅ぎながら、朝のニュース番組をチェックする程度だ。

そこに、中庭からさらにもう二人がやってきた。

一人は長身に長髪の豊かな肢体の女性。もう一人は、金髪で小柄、可憐というべき少女だ。手には竹刀を持っている。どうやら道場でひと汗かいてきたようだ。

「おはようございます、サクラにタイガ。それにリツカも」

「おはようございます。リツカ」

「おはよう、セイバーにライダー」

一瞬、この呼び名に違和を感じたけれど、それも無視だ。なんでだろう、今日は普段のことにも違和感をぬぐえない。

「大丈夫ですか、リツカ? どうやら顔色が優れないようですが」

「うん、大丈夫。まだ少し寝ぼけているだけだから」

心配そうなセイバーにそう返す。

「朝食を食べれば元気も出るでしょう。それではセイバー、シャワー

は私がお先に」

ライダーの方は、淡く微笑してシャワー室の方へ行つた。彼女はこれからバイトがあつただろうから、すぐに仕度したいのだろう。

僕とマシユ。それに加えて、賑やかで華やかな女性陣。そしてこの家の家主。合わせて八人の大所帯での朝ごはんが、ここでの日課となつていた。

そして、台所から魚の焼ける匂いとともに、彼が居間に姿を現した。「おーい。みんな、朝食できたから、運んでくれ。ほら、立花もぼーつとしてないで手伝つてくれ」

変になじむ紺のエプロンを身に纏つた、赤銅色の短髪に鍛えられた体軀の青年。いつの日にか、英雄の道を歩むであろう少年が、そこにいた。

「ああ、わかつたよ。——士郎」

そうしてワイワイとてんやわんやしながらの日々が始まる。かけがえのない日常。ありえないはずの平穏。どこか致命的な違和感を孕んだまま、物語は始まり、動き出す。



## e p l 偽りの平穩

「穂群原、学園……?」

校門の前に立つ。

馴染んだはずの名前。通っているはずの高校だった。はて? 僕が通っていた高校は、本当にこんな名前だっただろうか?

「どうしたんですか、先輩?」

「ああ、いや。なんでもないよ」

今日は、何故だか調子が悪いらしい。どうにも『間違えている』という感覚がずっと付きまとってくる。

「……そうですか。でも調子が悪いなら、無理をしないでくださいね?」

「心配してくれてありがとう、マシユ。でも大丈夫だから。ほら、遅れちゃうよ?」

「そ、そうですね。今日は一時間目が葛木先生ですから、急がないと!!」

それでは、とマシユと別れる。マシユは僕のひとつ下の学年なのだ。パタパタと走っていく彼女を見送って、僕も自分の教室に急いだ。

マシユにはそう言って強がって見せたが、校舎に入っても、教室に入っても、授業が始まっても、その奇妙さが抜けていくことはなかった。

「おい、立花。次は美術の時間だろ? 準備しなくていいのか?」

隣の席の士郎が、行こうぜと促してくる。

「あ、ああ」

そうだ。そういえば今日は月曜日なんだから、この時間割だと美術になっていたはずだ。言われてからもたもたと用意を始める僕に、後ろから声がかかる。

「まったく。藤丸はダメダメだよねえ、いつつもぼんやりしててさあ。睡眠時間足りてないんじゃない?」

ハハハ、とパーマのかかった髪をかき上げながらやってきたのは、

間桐慎二。顔はいいし声もいいのだけれど、いかんせんその性格が妙に捻じ曲がった男だ。その癖女子受けはいいのだから納得がいかない。

「まあまあ慎二、立花は帰国子女だから。まだ時差ボケがあるんだよ、きつと」

「いや、一月経ってまだ時差ボケなんて、そんなわけないだろ」

呆れたように返す慎二に、「そりゃそうだ」と苦笑する士郎。士郎め、もとよりフォローする気がないな。

三人で、益体もない世間話をしながら、廊下を歩く。美術室まで行くまでの間の廊下は、日当たりもよく、グラウンドが良く見える。次の時間の体育の準備をしている生徒たちが、そこで準備体操をしているようだった。

「ほらほら皆さん!! 準備体操はきつちりと!! 柔軟も忘れずに行ってくださいね!! 特に首と手首は入念に。今日は、盾を持って二人一組でタツクルの授業を行いますからね!! なに? 厳しい? 辛い? 意味不明? 何をおっしゃる、私の授業はそう、『スパルタ』ですから!!」

開いた窓から聞こえる、むさ苦しくて既視感ならぬ既聞感のある男の声。

「何なんだ、あれ」

半裸の筋肉質な男性教師が、盾——ではなく、ラグビーで使われるようなヒットバッグを掲げて叫んでいた。ほんと、何なんだ、あれ。

「何って、レオニダス先生だろ?」

いや、何当たり前みたいに言っているんですかね。

「穂群原学園ラグビー部と言えばレオニダス先生じゃないか。現役時代、その守りは鉄壁以上。正に要塞と言われた伝説の選手。教師になつてからも、その類まれなカリスマで、熱く厳しくスパルタに生徒を導く、いい先生だよ」

「何やってるのさ、スパルタの王様……」

「王様?」

「え……? あ、あれ? なんて、王様なんて言っちゃったんだろう」

何故だか、口から自然とそう漏れた。どうしてか、あのレオニダス先生が戦場で先陣切って味方を鼓舞している風景が頭に浮かんだのだ。教職よりもそちらの方が、よほど自然であるような気がする。いや、どちらにせよ王様が戦場にいるって間違いな気がするけど。

「おい、衛宮に藤丸!!。いい加減授業に間に合わないだろうが」

イライラしたような慎二の声に、悪い悪いと謝りながら先を急ぐ。

「……全く、流石は人類最後のマスターか」

「ん？ 慎二、何か言った？」

「愚図で間抜けな友人を持つと苦勞するって言ったんだよ」

そう言うと、慎二はズカズカと一人歩いて行った。何でだろう、すごく大切な言葉を聞き逃したような……。

「ああもう、待てよ慎二!!。ほら、立花も行こう。流石に授業に遅れる」

「あ、ああ。うん」

士郎に促されて、そうして僕は窓際から——もしくは真実から——離れたのだった。

※

「てやんでい、授業で春画を描くことの何が悪いってんだい!!。オイコラ離せやい!!。女体!!。女体を描かせろおおお!!」

「フッフ、数学の時間だネ。吾輩の担当サ!!。うら若き婦女子の皆さん、吾輩のことは気軽にパパとでも……え、胡散臭い?。犯罪臭?。新宿おじさん?。そんなー」

「それでは、化学の授業を始めます。ええ、まずは賢者の石の精製から……。え?。ダメですか。ならばホムンクルスの……それもダメですか……」

「えー。僕、人に教えるの無理なんだよね。だって天才だし?。そういうわけで、今日は僕の即興演奏会でも「アマデウスウ——!!」僕は逃げるから、あとの授業はサリエリ先生にお願いしてくれ」

何故だろう。何もかも間違っている気がする。

嵐のような、けれどいつもの通りであるはずの一日が過ぎ、すでに

HRも終わってしまった。

「ほらー、早く帰んなさいよ。日が暮れないうちにねー」

藤村先生の声に追い出されるように教室をでる。

「放課後どうしよっか？」

学校から自宅に直帰というにはまだ早い時間だろう。どこかに寄り道でもしようかと、土郎と慎二に声をかけてみたのだが、

「放課後？ 悪いな、俺はこれからマウント深山でバイトがあるんだ」「僕は部活だし。さすがに顔を出しておかないと桜がうるさいからね」

二人にふられ、仕方なく一人でぶらぶらしようかと校門に向かえば、そこにいたのは眼鏡にショートカットの似合う、自慢の後輩がいた。

「お疲れ様です、先輩」

「ああ、マシユもお疲れ様。今日はどうだった？」

ねぎらいの言葉とともに、なんとなしにそう問うた。すると彼女は、不思議そうに首をひねった。

「ううん、何と言えはいいのでしょうか……。いつも通りのはずなのに、新鮮で刺激的というか。何だか濃厚な一日でした」

「マシユもそう思ったんだ……。僕も何だか、いつも通りって感じがしないんだよね」

彼女もまた、僕と同様に違和感を抱いていたことにどこか安心する。

僕と同じ帰り道の学生。買い物へと向かう主婦。すでにランドセルを置いて友達のもとへ向かう子供。それぞれの生活が垣間見える、いつもの光景。人々の喧騒が耳に心地いい。

僕はこんなにも『いつも通り』を大切に感じるような人間だったのだろうか。自分自身に首をかしげながらも足を動かしていく。

「そうだ先輩。気晴らしに買い食いでもどうですか？ 私、少し憧れだったんです」

この違和感の正体がかめずに悶々としてっていると、不意に彼女がそう提案してきた。そういえば、この通りの近くに商店街があったん

だっけ。

マシユに手を引かれて行くと次第に人通りが多くなってきた。

「ああ、ここが商店街かあ」

商店街くらい来たことあるはずなのだが。いや、食事は土郎や間桐さんに任せきりだからな。案外、今まで来たことがなかったかも。

「おう、なんだ坊主に嬢ちゃん？ デートか？」

「うおお!？」

背後からいきなりの若い男の声に驚いて振り向くと、そこにいたのは魚屋のエプロンを身に纏った男だった。痩身でありながら鍛え上げられた体つき。人のいい笑みを浮かべるのは、

「——ああ、ランサーじゃないか」

魚屋でバイトしてたり、ふらふらと漁港で釣りをしている近所の兄貴分。時たま自分で釣った魚と酒をもって衛宮邸に乗り込んでくる気のいいお兄さんだ。

「今日はアロハじゃないんですね」

「そりやあなあ。勤め先でアロハは着ねえよ。ところでどうしたんだ？ お前さんがここに居るのは珍しいだろ」

「それは、私が……。ええと、少し、買い食いというものに憧れがありました……」

恥ずかしそうにそう言うマシユはなんて可愛いのか。さすがは僕の自慢の後輩である。

「ははーん、なるほどねえ。育ちのいいマシユの嬢ちゃんからしたら、買い食いも魅力的に映るわけか。ま、それだけじゃないみてえだが」

「ら、ランサーさん!!」

揶揄うランサーに頬を染めて照れるマシユ。どうやらマシユとランサーで通じ合うものがあるご様子。むむむ、何だか疎外感だ。

「……………この調子じゃあ、あと何年かかるやらって感じだが」

そういつて、やれやれと両手を上げるランサー。むう、何だか勝手に呆れられているようだ。こちらとしては釈然としないけれど、何だかこれ以上踏み込むのも墓穴を掘るようで怖い。話題を変えてみよう。

「それより、ここら辺で何かおいしいものは知らないかな？」

「この商店街で働いているランサーなら、その顔の広さも相まって、どこかおいしいところを知っていそうだ。」

期待の眼差しで見つめる僕とマシユに、ランサーは少したじろいだ。

「酒やつまみなら、おすすめめの店の一つ二つはあるんだが……。セイバーなんかはここでよくだい焼きを買ってくけど——」

むむむ、と悩むランサー。と、そこに、

「ちよおつと待った——!! 話は聞かせてもらいましたよ!!」

道の向こうから爆速で駆けてきて、くるっと一回転して十点の着地を決めたのは、赤いショートカットが似合う、年上の女性だった。

「ええ、ええ。どうやらお二人は甘いものをご所望であるご様子。しからばランサー、どうして私を呼ばないのです、ここは私の出番では？」

いつもの通り、男装の令嬢ともいふべきパンツスタイルのスーツの上からパステルカラーのエプロンをかけて現れたのは、バゼット・フラガ・マクレミツツさん、通称バゼットさんだ。時折、衛宮邸にランサーとともに押しかけては食材を恵んでもらっている残念な人だ。優秀な人であるらしいのだけど、見た限りではアルバイトをするたびに首になっている可哀そうな人という印象が強い。

「お久しぶりです、バゼットさん」

「ええ、久しぶりですね、藤丸君にマシユさん。ところで開幕早々とても侮辱された気がするのですが、私の気のせいでしょうか」

「気のせい気のせい」

「そうですか、と構えた拳を下げるバゼットさん。そういうところだと思っうんですよね。」

「それでバゼットさん。私の出番、とおっしゃっていましたが」

最初の話題に戻るマシユに、バゼットさんは然りと頷いた。

「ええ。実は最近また新しく仕事をはじめまして」

「そう言っって彼女は、大きな氷を取り出した。」

「かき氷屋です」

「かき氷屋」

「そうです、かき氷屋です」

彼女は深く頷いた。

「今まで、不本意ながら私は様々な職場を転々としてきました。ここが日本だからでしょう、私はなかなか馴染むことができなかった」

「いや、別に日本の風習がどうこうってわけじゃねえだろ、マスター」  
「シヤラップ、ランサー」

「んんんん!?!」

口を押えるランサー。バゼットさん、今躊躇いもなく令呪を使いま  
せんでしたか？

「いつまでもランサーに甘えるのはいけない。これではマスターの威  
厳を保てません。そこで私は考えました。雇われる側に甘んじてい  
るのがいけないのだと」

「そこは甘んじているべきだったのでは……?」

辛辣なマシユの突っ込みも無視して、バゼットさんは続けた。

「一から自分で起業すればクビにされることもありません。そこで私  
は考えました。もとでの少ない身で、どうやって店を開くのか。熟慮  
の末に思い至ったのが、そう。かき氷屋なのです。これならば、氷と  
砂糖さえあればいい。天才ですな私」

どやあつと、一袋の砂糖と氷塊を掲げるバゼットさん。

「いや、砂糖って。シロップはどうしたんですか」

「藤丸君。かき氷は甘ければいいのです」

それは違うなあ。

バゼットさんのあまりのダメさ加減に頭を抱えていると、今度はマ  
シユが問うた。

「ええと、バゼットさん。かき氷というならば、氷削り器はどこに？」

そう言えば、とバゼットさんを見やると、彼女はポイと無造作に氷  
塊を空中に放った。

「ハッ!!」

まさに一瞬。彼女の拳が氷塊を木っ端みじんに砕く。そして飛び  
散る氷の破片をシユパパパと空の器に収めて見せた。

「つまりこういうことです」

うーん、人外。本当に人間なんですかねこの人。

「これに砂糖をかければ、ほら出来上がりです」

正に一仕事終えたとばかりの清々しい笑みとともに差し出されるかき氷（自称）を、仕方なく受け取る。

「五百円になります」

「馬鹿高い!？」

いやまあ、ある意味すごいものがみれたと思えば、うん。確かに人間離れた技ではあるしね。大道芸にお金を払ったと思う。

仕方なく五百円をバゼットさんに支払った。悲しい。

「毎度あり。それでは、藤丸くん、マシユ嬢。そしてランサー、今夜こそはあなたに夕飯をご馳走して見せましょう」

そう言つて、彼女は颯爽と去っていった。

「いやほんと、うちのマスターがわりいな……」

ようやく復帰したランサーが、ポンと肩に手を置いて呟いた。

「その、だいぶ個性的と言うか」

「嬢ちゃん、素直に馬鹿つて言ってくれて構わねえよ。……ほんとにアレさえなければいい女なんだが。師匠とは違う意味でアレなんだよな」

はあああ、と溜め息をつくランサーは、どことなく哀愁が漂っている。さすが幸運E。

「それじゃランサー、僕らはこれで。そろそろ夕飯の時間だ」

「それでは、ランサーさん」

買い食いに關しては微妙な結果となったが、これからまた新しくどこかを探すというのも躊躇われる時間だ。ここは素直にご帰宅しよう。

「おう、また今度魚もつて邪魔しに行くわ」

からりと笑うランサーと、手を振って別れる。けれど去り際に、どうしても気になったことを聞いた。

「ねえランサー。僕つて、ランサーのことを『ランサー』つて呼んでたっけ？」



「ああ？ そりゃあ、そうだろう」

「ああ、うん。ならいいんだ」

首をかしげるランサーと、僕らはそうして別れた。しこりのように残る違和感は、どうしても飲み込めなかったけれど。

## e p 2 剥がれ落ちた日常

「あちゃー、学校にノートを忘れてくるなんて……」

衛宮邸に帰宅した後、今日の授業を板書したノートを忘れたことに気づいた僕は放課後の学校へと舞い戻っていた。

夕焼けがやけに眩しい。黄金色の時間。昼と夜の境界線が近づいてきている。

教室は、予想通りにならんとしていた。廊下も、やはり人通りは少ない。この時間ともなれば、部活動にいそしむ生徒たちもそろそろ家路につく時間だろう。

机の中にあつたノートを手に、玄関口へと向かう。けれど、

「あれ？ どっちだっけ？」

自分の記憶力に嫌気がさす。全く、転校してきてもう一か月も経つというのに、まだ校舎の作りを把握できていないなんて。

「ええと、階段がこっち側だから……」

拙い記憶を手繰り寄せながら人気のない校舎に行く。西日に照らされる廊下は、いつもの色彩をどこかに忘れてきたようだった。橙色に塗られた床が、寂しく映る。色を忘れた一面の光景はあまりに幻想的で、現実味がない。夕焼けに染められ、本来の色を失った世界は、僕に時間の概念さえ忘れさせようとしているようだ。

「あら、アナタ。忘れ物は見つかった？」

少女の声だった。透き通るようなあどけない、でもどこか毒を含むような声。

「あ、え……う？」

先ほどまでは、夕焼け色一色だったはずの世界に、一つの異分子がいる。

白い少女だった。

髪色は白。決して犯してはならないような、降り積もる雪の白を思わせた。

赤色の眼差しが、僕を射抜く。

「……なあんだ、まだなのね。期待して損したわ」  
当てが外れたとばかりに、彼女は顔を顰めた。

「ほんと、寝坊助だとは知っていたのだけれど。ここまで自堕落だと、救いようがないわ」

呆れ果てたとばかりに失望を隠さない。おいおい、見も知らない初対面の子供に、そこまで言われる筋合いはないぞ。

「あら、怒った？」

「そりゃあ、怒りまではしないけど。でもいい気分はしないよ」

「そう、それはそうね」

クスクスと、彼女は笑った。どうにもよく分からない。いったいこの子は、なにがしたいのだろう。そもそも、この学園の生徒だろうか？

「そうね、この世界は確かに居心地がいいのでしょうかね」

「え？」

すでに彼女の中では、話題は変わっているようだ。マイペースに、もしくは相互のコミュニケーションを取る気がないのか、一人彼女は語る。

「でも、いけない。アナタはここでぬるま湯に浸かっていい人間ではないわ。アナタには、やらなければいけないことがある。世界を救つたものよ、歩みを止めることを赦さなかったものよ。かの魔術王を否定したアナタに、ここで停滞する権利はない」

「な、なにを」

何を言っているのか分からない。理解できない。でも、それでも、何かとても大切なことを、目の前のこの少女は僕に気づかせようとしている。

「本当は、自分で克たねばいけないの。でも、こうなったのは私たちの責任だものね」

そして彼女は、唐突に僕の手を取った。

「へ？ な——いつ!？」

熱い、焼きごてを当てられたような痛みが手の甲に走る。でもそれ

は一瞬で、すぐに痛みは消えてしまった。代わりに残ったのは、赤い、深紅の刻印が三画。

「それは、アナタが失くしてはならなかったもの。アナタが初めて背負ったもの。アナタが抱え背負わなくてはならない、力と責任、そして絆の証」

何かが流れ込んでくる／巻き戻っていく。見たことのない光景／忘れてはならない世界。ありえない記録／かけがえない記憶。空想の中の物語／現実でしかない軌跡。憐憫の魔術王／答えを得た人の王。頼りない笑顔／空っぽの玉座。

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルンの名のもとに、この令呪の最初の一面に特別の力を。令呪はマキリの分野なのだけれど、今の私は聖杯そのものだから、これくらいの融通なら利くの。これを餞別としましょう。直、『夜』が来る。女神の権能が揺らぐ。さあ、行きなさいカルデアのマスター。偽りだらけの、この狂った聖杯戦争に終止符を打ちなさい」

そしてどうか、彼女を終わらせてあげてほしいの。

茜色はいつの間にか紫となり、そして黒へと変じた。昼と夜の境界を越えた。世界は正常から異常へ。日常から非日常へ。僕はようやくスタートラインに立ったのだ。

「あ、あの——あれ？」

己を聖杯と名乗るよく知った見た目のその少女は、いつの間にか姿を消していた。

「今度会ったら、ちゃんとお礼を言わないと」

取り戻した令呪を握りしめる。彼女は言った。この聖杯戦争を終わらせろと。ならばその通りにしよう。彼女から、イリヤスフィールから託されたものを果たさなくてはならない。

暗闇に支配された廊下を駆ける。それはまるで矢のように。停滞した偽りの日常を終わらせるべく、今ここに人類最後のマスターの戦いが、ようやく始まった。

※

世界は様変わりしていた。

「誰も、いない……？」

夜になった途端、人の気配が消えていた。先ほどまでいたはずの生徒たちも、部活帰りの生徒たちもみな跡形もなく消えてしまった。

「いや、何か……」

首の後ろがチリチリとするような感覚。今までの特異点の旅で染みついた、危機に対する第六感が騒ぐ。

逸る心を押さえつけて、校舎から転がりだすように飛び出した。

地上に人の気配はない。街頭の明かりだけがポツンポツンと夜道を照らしている。どうやら電気は届いているらしい。

キチキチキチ

非日常に落ちた世界で、蠢く影があった。僕がよく知る学園の制服を身に纏う人型が彷徨うように歩いている。

キチキチキチ

「あ、あの、すいません。アナタは……」

その背に、思い切って声をかける。

グルグルグル

キリキリキリとゴリゴリゴリと。それは人の口から奏でるものではなく――

「ガギギギギギツ!!」

「ああクソツ!! やっぱりそうだよなあ!!」

転身して一目散に駆けだす。くそつたれ、シャドウサーヴァントじゃないか!!

最早、人の動きではなかった。穂群原学園の生徒だったはずの生徒は、四つ足となって僕を追いかけてくる。

後方の元生徒のシャドウサーヴァントに加え、前方にはさらなる敵影を見つける。これ、もしかして生徒も先生も、不完全とはいえ、全員サーヴァントだったってことか。

「っていうことは、ここの、敵に囲まれてるじゃんか!!」

いや、それだけじゃない。この冬木の街全てが敵……？　ここの生徒も、商店街の人たちも、みんな……？

そんなこと、今までもたくさんあった。第七の特異点では、もつと酷いものを見たはずだ。だけどだからと言って、慣れたなんて言えなくて。日常のぬるま湯にずっと浸かってきたからむしろ余計に、僕はその事実にはショックを受けていた。それこそ、一瞬、敵に囲まれて絶体絶命だと忘れてしまうくらいに。

「しまった……!!」

たどり着いた先は行き止まり。ああもう、どうしてこうこの学校は入り組んでいるんだ!!

「ガンド!!　ガンドガンドガンドオ!!」

拙い魔術だ。それでも、今までの旅の中で、多くの英霊たちに鍛えられてきた。僕を弟のように可愛がってくれる神代の魔術師にその師であるオケアノスの魔女、神秘学の権威や新大陸のシャーマン、時計塔の講師と錚々たる人物に師事してきたのだ。これくらい凌げなくてどうする!!

硬直する機械の先兵らの横を抜け、玄関へと抜け出す。まずはこの学園から逃げ出さないと。

校庭を駆ける。シャドウサーヴァントの追撃を躲しいなしていく。サーヴァントといえど所詮は出来損ないの影に過ぎない。このくらい、ひるませる程度であればどうにでもなる。だが、校門のすぐ前。ユラリと暗闇の中に、なお暗い影が立つ。

「人……じゃ、ないよな……？」

あれも、シャドウサーヴァントだろうか？

暗がりから、徐々にこちらに歩み寄ってくるソレを見る。

ソレはやはり人ではなかった。左右にフラフラと重心が揺れる。歩き方だけで、真面な状態ではないと分かる。今までシャドウサーヴァントとは違う、色を持った人型。

姿を見せたのは、

「バゼット、さん……？」

暗がりより出でたのは、つい先ほど言葉を交わしたはずの、短髪赤髪の男装の令嬢だった。

「う、ウガ、グウウウウツ」

しかし、その瞳に正気の色はなかった。目は赤く染まり、口は半開きのまま。焦点は定まらず、茫洋としていた。そこに人の理性はなかった。獣の本能だけが、今の彼女を支配している。

そして何より、見逃せない。ボロボロのスーツからはだける彼女の肌の所々に、赤い文様が這っている。既視感のあるその血色のごとき文様は、人類最古の英雄王や戦と豊穡の女神、ギリシャ最大の英雄の肌に見たものに酷似していた。

それは神性の証。人ならざるものの血が流れる証左に他ならない。

つまりは――

「疑似サーヴァント……!?!」

彼女は果たして、僕の言葉を理解したのか、もしくはそうでないのか。擦れた喉で鳴いた。

「こ、ロス。女神ノるーるニ、ソムク、スベテ、ヲコロ、ス。コロス。

コロス、コロスコロスコロス!!」

「バゼットさん、どうして!!」

答えは拳で返ってきた。

一瞬で僕との間合いを詰め、致命となるその鉄拳を振るう。反応できたのは奇跡に近い。カルデアの日々の訓練で磨かれた危機察知能力が、たまさかい方向に出ただけだ。

――でもスカサハ師匠のシゴキに感謝だよ、ほんと!!

僅かに迫る拳から身を逸らす。紙一重で逃れるも、その一撃は人外のそれである。風圧だけで僕の身体は軽々と吹き飛ばされた。

「う、ぐあああああつ!?!」

ゴロゴロと無様に転がる。追撃はなかった。どうやら、今の彼女に理性らしきものはない。恐らくはバーサーカーのサーヴァントなのだろう。理性があつたなら体制の整わない僕を襲わない理由がない。

即座に起き上がり、相手を見やる。

相変わらず、動きは鈍い。動作の一つ一つは恐ろしく速いが、その動作一つ一つが驚くほどに繋がっていない。まるで、逐一指示が入力されなきや動かない不出来なロボットを思わせた。

「う、グアアアア!! コロスコロスコロス!!」

殺し損ねたことに怒りを覚えたのか。彼女は雄たけびをあげるとともに、再びその拳を握る。真っ赤に染まったその目が僕を射抜く。人の理はそこにはない。夕暮れに染まる商店街で、僕らに笑いかけてくれた彼女の面影はもはやない。

死が迫る。けれど、

「諦めない……!!」

僕にはまだ切り札が残っている!!

「来てくれ、マシユ——!!」

恥も外聞もなく、ただ叫ぶ。僕を目覚めさせた、雪の精がごとき彼女が授けてくれた令呪の一面が、熱く燃える。

「ウグアアアアアアアツ」

その鉄拳が迫る。でも、恐怖はない。何故なら、その盾を——僕の後輩を、信じているから。

「先輩——!!」

令呪の呼びかけに応じて、彼女が戦場に降り立つ。淡い色の髪を靡かせ、その瞳に強い意志を秘めて。彼女は僕とバゼットさんとの間に身体を滑り込ませ、その盾を掲げた。

「いまは遙か理想の城——!!」

瞬間、かつての王城が幻視する。第六特異点にて会得した、彼女の内包する霊基本来の宝具。かつての栄光の城の護りをその盾に宿す、誰かを護るための力。

「間に合いました!!」

背中越しに僕に笑いかける彼女を見やる。その姿は紫に統一された騎士の鎧を身に纏っていた。

「記憶、戻ったの……?」

「はい。先輩の令呪のおかげでしょう、サーヴァントの霊基が起動したおかげで敵の術から逃れられたようです」



流石は盾の英霊だろう。対物対魔術を問わず、かの英霊は不浄の護りを持つものだから。

「ぐ、グオオオオオ……」

「……ッ」

跳ね返されたバゼットさんが、再び立ち上がろうとしている。追撃しようにも、マシユの護りを手放すのは愚策だろう。

「あれは、バゼットさん……う？」

マシユの言葉に、短く答える。

「うん。多分バーサーカーのデミ・サーヴァントだ。正気を失ってる」  
「どうやら、そのようですね……」

僕にも彼女にも、油断はない。ぎこちない動きではあるが、そのスピード自体は並みの英霊を遥かに凌ぐ。

「敵性、再定義。英霊、ヲ確認。ググウ、宝、具……解放」

赤き目が、僕らを見据えた。彼女は天高くに拳を掲げる。その拳の先には、浮遊する鉄の真球。用途は不明だが、そこに内包された神秘は莫大だ。

宝具。人理に名を刻んだ英雄の逸話が昇華した末に形作られた決戦兵器。その英霊の人生の軌跡そのものとも言えるそれは、使えばすなわち名を露にしてしまう諸刃の剣。而してそれを抜くということは、それは必殺で

なくてはならない。

つまり、ここで終わらせるといふ決意。

「宝具……!? あの状態で、真名開放を!?!」

マシユが驚きとともに円卓の盾を構える。

「先輩!!」

「ああ、分かってる!!」

パスを介して魔力を送り込む。あちらが宝具を使うというならば、こちらもまた宝具で対抗する!!

「あん、さらー」

獣がごとき彼女が構える。理性はないが、その戦技の冴えは曇りない。そこに彼女の鍛錬の成果を見た。

「抉り斬る、戦神の剣——!!」

「いまは遥か理想の城——!!」

バゼットさんの拳が振り切られ、その鉄球が放たれる。同時にそれは鉄の真球から形を変え、一本の短剣へと姿を変えた。

一方、マシユの盾はその真価を正しく発揮した。人理の礎、その本来の姿。白亜の城の城壁、不浄の護りがその盾にある。

しかし、

「どう、して……!!」

その護りは打ち砕かれた。かつて黒き騎士王の聖剣を防ぎ、聖女とともに邪竜の咆哮さえはじいて見せた、そして獅子王の槍さえも完全に受け止めてみせたその盾は、ついに破られた。否、盾自体に綻びはない。ただ、そう、その盾が間に合わなかった。

「あのタイミングで、間に合わないはずがないのに——!?!」

盾は、構えて初めて護りの効果を得る。つまりは、盾が構えられるより前に届いた攻撃は防ぎようがない。

あの短剣は、おそらく因果を捻じ曲げた。ああ、そうか。後から出でて先に穿つ。後手の先の究極系が彼女のもつ宝具なのか。

「先輩っ!?!」

マシユの取り乱す声を聴いた。でも、その言葉は正しく頭に入力されない。痛みがひどい。見れば、己の腹が食い破られていた。

「あ、ぐふっ」

血だまりに沈む。流れる血はこんなに温かいのに、どうしてか身体は恐ろしく寒い。

追撃が来る。迫る彼女に、せめて眼だけは逸らすまい。逃げることさえできなくても、せめて立ち向かう覚悟くらいは示さねければ。でもマシユは逃げてほしいと思うけど。

乾く眼球を無視して、覚悟を決めた。けれど、来るべき最期が僕に届くことは無かった。

夜を、裂帛の音が割く。

「——石兵八陣!!」

それは、かの大軍師・諸葛孔明が敗走の際に用いたという巨石で構

築された陣。空間を捻じ曲げて閉じ込める、不脱の檻が建つ。

「貴方たちは——!!」

「御託は後!! 逃げるわよ!!」

現れたのは、二人。

長い長髪に眼鏡、スーツ姿のよく似合う時計塔の講師。そして、空を駆ける黒髪にツインテールが目印の、金星の女神。

「大人しくしててね。いくらサーヴァントの霊基とはいえ、人を抱えて飛ぶなんて真似は初めてなんだから!!」

彼女の船に載せられて、僕とマシユ、そして時計塔の講師は夜の空を舞う。

上空から見た街には、生気がなかった。家に明かりはなく、道を走る道路もない。死んだ街が眼下には広がっていた。

「……うぐっ」

「せ、先輩!!」

思はず声を漏らした僕に、彼が言う。

「これが、今の本来の冬木だ。女神の権能が弱まる夜の間は、こうして虚構のテクスチャが剥かれる。……と、そんなことを言っている場合ではなかったな。今、治療しよう。何、見た目は酷いが致命ではない。うまく内臓が避けられている」

相変わらず眉間にしわを寄せて彼は答える。その眼差しはいつになく厳しかった。

「落ち着いて、マシユ。その人がそう言うってことは大丈夫よ。魔術の腕は微妙でも、観察眼と指導力だけはピカ一なんだから」

僕らを窮地から救ってくれたのは、既視感のあるはずの二人。でもきつと、僕らが知る二人とは別人なのだろう二人。

そうして、都会の空で、僕らは夜の邂逅を果たした。

「意識ははつきりしているな? 私の名は、ロード・エルメロイⅡ世。時計塔の講師をしている。まあ、なんだ。こんな状況だが歓迎するよ、異界のマスター君」

「私は、遠坂凜——って言っても、昼には会っているし、そもそもこんな状況で自己紹介なんて言ってる場合でもないんだけど」

人類最後のマスター、どうかこの世界を、彼女の夢を終わらせてほしい。

その言葉を最後に、僕の意識は遠のいていった。

## e p 3 夢から目覚めて

「今回も、微小ながら特異点反応が観測された」

いつもの通り、呼び出しを受けた僕は、マシユとともにダヴィンチちゃんからの報告を聞いていた。

「場所は、日本の冬木市。幾度か訪れたことのある土地だね。どうにもここは聖杯戦争の舞台だったからか、ほかに比べて揺らぎが多いらしい」

ダヴィンチちゃんの言葉を受けて、もう一人が言葉を継いだ。

「余裕があれば、もう少し時間を割いて調べるのもいいのだろうか。ね。何分、もう引き継ぎの日は目の前だ」

目の前の謎に取り組むことができないのを、心底残念そうにしているのは、ダヴィンチちゃんに次ぐこのカルデアの頭脳の中の一人。かの名探偵、ホームズその人だ。

僕らカルデアは、人理焼却事件をどうにか解決し、その後も冠位神殿から逃げ出した魔神柱たちの搜索および討伐を行ってきた。つい先日、アメリカ——セイラムにおいて、逃げ出した最後の魔神柱を討伐。あとは、魔術協会主導によるカルデア解体の日を待つだけとなっていた。

「藤丸君には、また負担を強いることになってしまうけど……」

申し訳なきそうにしているダヴィンチちゃんに、僕はいいやと首を振る。

「気にしないで。実は暇していたところだし」

もともと一般人で、魔術とは無縁の世界で生きてきた僕だ。人理焼却の緊急事態から脱した今、もう僕の仕事なんて残ってはいない。カルデア唯一のマスターの仕事は特異点の攻略だけ。平穩を取り戻した世界に、マスターの仕事なんてない方がいい。

召喚に応じてくれていたサーヴァントたちも徐々にカルデアから退去する人たちが出てきている。普段相手にしてくれるサーヴァントも減ってきていた。暇を持て余しつつあるのだ。

「そう言ってくれればありがたいのだけどね」

苦笑してダヴィンチちゃんは続けた。

「今回の特異点は、申し訳ないんだけどどうまく観測できていないんだ。シバの不調もあるんだけど……どちらかというところ、この特異点自体に問題があると言っている」

「問題、ですか？」

可愛らしく首をかしげるマシユ。ああ、僕の後輩は今日もかわいいなあ。

「単純に、小さすぎて観測できないってことさ。……あまり派手なことにはなっていないだろう。まあ、こういう時の予想って大体外れるものだけだ」

「縁起でもないなあ」

溜息を吐く。といっても、今まで何度もこういうことはあった。今回も乗り越えて見せるさ。

「というわけで、さっそく藤丸君にはレイシフトしてもらうんだけど……」

「今回は、というか今回も、私が同行します!!」

ピツと片手を挙げたのは、もちろんマシユだ。

「それはうれしいけど、でも大丈夫なの？」

冠位神殿での戦いの後、彼女の霊基は不安定になっている。人としての生活に支障はないが、サーヴァントとしての活動は著しく制限されているはずだ。

マシユだけでなく、ダヴィンチちゃんやホームズにも顔を向けた。

「その不安は、その通りなんだけど。今回のレイシフト先は現代だから、戦闘以外でも役に立っている場面はあるだろうということだ」

「ハイ、そういうことです先輩。必ずお役に立って見せます!!」

フンス、と鼻息を荒げるマシユに、やれやれと首を振るダヴィンチちゃんとホームズ。もろ手を挙げて、とは言わないけれど、二人がそういうのなら従おう。僕としても、マシユが隣にいてくれるのは心強い。

「うん、それじゃあ二人とも準備はいいかい？ ほかにも何名かサーヴァントが同行するから、戦闘面の心配はいらない。さあ、藤丸君、こ

れが最後の奉公だと思って頑張ってきてくれたまえ!!」

そんな、彼女らしい言葉に見送られ、僕らは2014年の冬木市へと飛び立った。

※

「うっ……ぐっ」

「せ、先輩!!」

この地に来るまでの記憶を微睡の中で思い出していると、次第に意識が明瞭になってきた。腹の痛みに呻くと、僕が起きたのに気付いたマシユが、不安そうに声を挙げて僕の手を握った。

「だ、大丈夫……だから」

後輩を不安にさせるのはよくない。ここは先輩らしく、無理して強がるどころだろう。

強がりで起き上がろうとする僕を止めたのは、葉巻を咥えた、長髪の男性だった。

「あまり無理をするものではない。痛みが鈍いのは単に麻酔が効いているだけだ。横になっていたまえ」

相変わらず眉間に皺を寄せっぱなしでそう言うのは、

「ロード、エルメロイ……先生……」

「II世を付けたまえ」

ああ、ここでもやっぱり拘っているんですね。

アハハ、と力なく笑っていると、もう一人の方も僕が目を覚ましたことに気づいたらしい。

チエシヤ猫のような目をした、赤のよく似合う少女。

「あら、藤丸君。目が覚めたのね。……見かけによらず割とタフなのね」

「イシユ、タル……?」

「イシユタル……? ああ、この霊基は確かにそうね。私は遠坂凜よ、知っているでしょ?」

遠坂凜。確かに、それは知っている。『昼』の時間において、半ば衛宮邸に居候のような状態になっている穂群原学園の学生の一人。赤色が見事に似合う、学校のマドンナ。でも、どうしてここに――

「いや、『遠坂』って確か」

始まりの地とも言える、冬木市。かつて聖杯戦争が行われたというその地に根付く、魔術師の三つの家系を、御三家と、そう呼んでいたらしい。カルデアのログでそれらしき文章を読んでいた気がする。

「まあ、その通りね。私はこの地を治める遠坂の現当主ってわけ」

「いや、でも、遠坂さん。さつきマアンナ呼んでましたよね……？ それに、この霊基って」

いかに魔術師であろうとも、まさか女神の船を呼び出せるとは思えない。頭をかしげる僕に、ロードが声をかけた。

「それについては私から説明しようか」

相変わらず、眉間に皺を寄せたまま。どこから持ってきたのか作りのいい椅子に深く腰掛けて、そうして彼はこの特異点について語り始めた。

「とりあえず、君たちが所属するカルデアがいったい何なのかについては、君が寝ている間にマシユ嬢から訊いているのだが」

懐から取り出した葉巻に火を灯らせて、エルメロイⅡ世は続ける。

「まず、君たちはこの冬木市が何年にあたるのかは知っているかね？」

「え、それは2004年ですよね？」

今までこの特異点に来てから、ずっと学校生活を送ってきているのだ。そのくらいは分かる。

しかし、僕の返答に対してエルメロイⅡ世は「やはりか」と煙を吐いた。

エルメロイⅡ世の言葉を引き継ぐように、遠坂さんが口を開いた。

「残念だけど、今のこの時代はその十年後。2014年なのよね」

「え、いやでも、昼の間は……」

確かに、2004年だったはずだ。

「そうだ。確かに『昼』は2004年だ」

『昼』は？

「この世界の本来の時間軸は2014年だ。……だが『昼』の間、この町は2004年を再演し続けている」



「再演……?」

「この冬木市は、すでに本来の時間軸から切り離されている。君たちカルデアとやらがここを『特異点』と認識したのもそのためだろう」  
「つまり、本当は2014年の冬木市が本来の歴史から切り離されたうえで、2004年の冬木市がそこに上書きされている……?」

「そういうことだ」

それはどうしてだろうか？ 2004年に用があるのなら、本来の2004年に特異点を創るだろうに。

「そう、聖杯に願った誰かがいる……?」

そうして、ロードはこれまでの経緯を静かに語りだした。

「この冬木市を舞台に聖杯戦争が行われていたというのは、そちらでも認識しているとマッシュ嬢から聞き及んでいる。この世界線でも、聖杯戦争は計五回、この地で行われた」

それはかつて第四次聖杯戦争の特異点のときに、聞いたことがあった。

「万能の願望器。それを巡って、この地を治める御三家と外部の魔術師たちがサーヴァントを召喚して殺し合うバトルロワイアル。でも、その実態は……」

「そう、その実態は大嘘だった。どう転んだって御三家のどこかが聖杯を手に入れられるように仕組まれたものだった」

御三家と呼ばれる、遠坂、間桐、そしてアインツベルン。この三つの魔術師の家系による第三魔法へと至るための儀式。呼び出されたサーヴァントも外部からのマスターも全てこの儀式のための生贄。それが、この聖杯戦争の正体だった。

「それだけなら、魔術師の間ならよくある話であるのだがな。それだけではなかった。冬木の聖杯は、この時点ですでに汚染されていた」

それについては詳しく知らない。僕らの世界ではそうではなかったらしいが、この世界では何某かのイレギュラークラスを召喚した際に、聖杯は汚染されたらしい。

「第五次聖杯戦争が行われ、そこで間桐の当主は死亡。聖杯の汚染は

白日のものとなり、聖杯は破壊された。汚染された聖杯による被害も、多くの犠牲に支えられながら致命となる前に食い止められた」

「それが、2004年……」

先ほども話題に上がった、2004年か……。

「では、もうこの時代に聖杯は存在しないのですか？」

マシユが問うた。確かに、この2014年に聖杯がないのであればこの時代が特異点化するのはおかしい。

「いや、破壊したのはあくまで小聖杯。大聖杯——いわば本体は今まで残ったままだったわけだ」

「その十年後——2014年に、遠坂の当主である私が、教え子のよしみでロードに協力してもらって、その大聖杯を解体するに至ったわけね。……まあ、失敗してしまったのだけど」

はあー、と溜め息を吐く遠坂さん、なるほど、予想はつく。ここ一番でポカをする。どこかの女神もそんな感じだったっけ。肉体の方の体質だったのか。

「今とても失礼なこと考えてたでしょ」

「いえ、全然」

無駄に勘がいいなあ。

「ともかく、我々の大聖杯解体の計画に不備はなかったとだけ言っておこう。彼女の裏切りさえなければ、こんなことにはならなかった」  
沈痛な面持ちで、エルメロイⅡ世は紫煙を吐いた。不備はなかったと言いつつも、そこには自身への後悔があった。

「その、裏切り者っていったい誰なんですか？」

当然の僕の問いに、遠坂さんはひどく感情の抜け落ちた表情で答えた。

「間桐桜。……私の、妹よ」

衛宮邸で過ごした日々の中にいた、夢げでありながら芯のありそうな少女。衛宮のことを後輩と言って慕っていた彼女が、今回の黒幕……？

でも、

「間桐……ですか？」

マッシュが言う。それは、この冬木を根城にする魔術師の家系の一つだったはずだ。

「桜は、私の妹よ。正真正銘ね。小さいころ、間桐に養子に出されたのよ」

「なるほど……」

つまりは、家の悲願を捨てきれなかった彼女の暴走が、この事態を引き起こしたのか。

「違う!! それは絶対に違うわ。……あの娘は、魔術師の悲願とか、根源への到達なんて間違っても願うような娘じゃない」

予想外に強い否定に驚く僕とマッシュに、「ごめん……」と遠坂さんは謝った。

「ちよつと、感情的になりすぎね。ごめんなさい、少し外に出てくるわ」

いつもの表情は鳴りを潜めて俯いたまま、彼女は部屋から出て行ってしまった。

「流石に、無神経が過ぎたかな。実の妹を悪者みたいに言っちゃった」「いや、君たちは悪くない。……彼女も気が立っているだけだ。許してやってほしい」

「い、いや。別に気を悪くしたわけでは」

言うど、「そうか」とだけ、エルメロイⅡ世は頷いた。

「では続きを話そう。どちらにせよ、事件解決には背景を理解せねばなるまい」

「お願いします」

言うど、エルメロイⅡ世は続けた。

「大聖杯の解体途中、協力してくれていたはずの間桐桜が突然襲ってきた。完全に不意打ちでね。私とミス遠坂は致命傷を負った。その後のことは、記憶にない。恐らく、間桐桜は聖杯の力を使い、2014年の冬木に2004年の冬木を上書きした」

にわかには信じがたいことだった。仮初とはいえ、あの日常の中で

交流のあった菫色の髪の少女がそんなことをするなんて、少し想像がつかない。

「そのまま死に絶えるはずだった私とミス遠坂もなぜか生き永らえ、つい最近まで——いや、今でもあの仮初の日常に囚われ続けている」「今でも?」

「そうだ。……先ほども見せたが、私とミス遠坂は、今はサーヴァントだ」

確かに、僕らを間一髪で救ってくれたロードも遠坂さんもサーヴァントの能力を扱っていた。いや、でも、

「おかしいですよ? エルメロイⅡ世も遠坂さんも、普通の魔術師で、現地の人なんだから」

カルデアには二人によく似たサーヴァントを知っているから、違和感を感じなかったけど。

「……どうやら間桐桜は死にかけの私たちに、適合するサーヴァントの霊基を組み込んだらしい。この世界に存在する、ほかの人間もそうだろう。デミ・サーヴァントの逆だな。呼び出したサーヴァントに、この冬木市の

人々の人格を上書きしているんだ」

ただ人の身体に英霊を適合させるのがデミ・サーヴァントならば、今の彼らはその逆。サーヴァントの上辺に冬木の住人のパーソナリティを無理やり被せたのか。

「……では、そのサーヴァントを召喚したのは」

「間桐桜だ。……つまり、今の私たちのマスターは間桐桜本人だよ」

「!! では、今のあなた方は私たちの、敵なのですか……!?!」

部屋の緊張が、一気に高まる。

だが警戒を露にするマッシュに対し、時計塔の講師は相も変わらず落ち着いていた。

「その警戒は最もだが、今のところ君たちの敵に回ることは無いだろう。何せ、もう我々のマスターは正気ではないのでね」

かの少女を、己のマスターたるものを彼はそう評した。

もはや、正気ではないと。

僕らの混乱をよそに、彼は悔恨とも憐憫ともとれる口ぶりで再び紫煙を吐いた。

## ep4 十年後の顛末

「ここから先は又聞きだ。私は第五次聖杯戦争には参加していないのでね。……本来ならばミス遠坂本人に話してもらうべきだろうが」

時計塔の講師はそう前置きして、静かに語りだした。

「間桐桜は第五次聖杯戦争の折りに聖杯の器になっている。本来であればそれはアインツベルンのホムンクルスの役目だったろうが、そのあたりはその時の間桐の当主が上手く出し抜いたのだろう。と言っても、先に言った通り聖杯は汚染されていた。案の定、彼女は暴走したらしい」

いつの日か特異点と化した第四次聖杯戦争で見たような、呪いによつて汚染された聖杯の端末となるなんて、想像するだけでも良くないことだと分かる。

「加えて、彼女自身にも呪いといった負のエネルギーに対する親和性があった。かなり悲惨な幼少期を過ごしたらしいからな」

「魔術師の家系に養子となると、確かに……。魔術刻印の継承など体質の問題を改善・克服するには幼少から過酷な施術が必要と言われていきますから」

一般人代表の僕からすれば、魔術師のことなんてよくわからない。けれど人理修復の旅の中で、魔術師と呼ばれる人たちの妄執、執着は幾度も垣間見ている。きっと間桐さんもそれに巻き込まれてしまったのだろう。

「……結局、彼女の暴走は寸前で食い止められた。幾人かの犠牲の末にな」

彼女の義兄、間桐慎二。そして義祖父である間桐臓硯は黒き聖杯と化した間桐桜を利用するも、いずれも道半ばにして死亡。

そして、彼女の暴走を止めるためにアインツベルンのマスターでありもう一人の聖杯、アイリスフィール・フォン・アインツベルンと監督役の言峰綺礼が犠牲となった。そしてもう一人、

「衛宮士郎。セイバーのマスターとして今回の聖杯戦争に参加した、ほとんど一般人の青年が犠牲になっている。そして彼は、間桐桜の思

い人だったらしい」

偽りの日常。あの白昼夢がフラッシュバックする。

董色の髪をたなびかせた少女と、赤銅色の髪の精悍な青年が、並んで炊事場に立つ。手慣れた風な青年と、その青年をサポートするように調理する少女。そこには長い間に培われた信頼があつて、先輩はすごいですねと彼女が言えば、青年は桜だつて大したもんだよなんて返す。僕は居間でぼんやりしていて二人の背中しか見ていなかったけれど、きつと二人は朗らかに笑つていたに違いないのだ。

そんな春の陽気のような、侵しがたい幸福。それはもう、とつくに壊れてしまつていたのか。

「じゃあ、間桐さんが聖杯を手に入れようとしたのは——」

「かつての——第五次聖杯戦争が起こりえる以前の日常へ還るため、だろう。実際、そうなっている」

2014年の冬木市に上書きするように、2004年の冬木市を再現した。十年の月日は、彼女の傷を癒すには足りなかった。

「そうして今の状況が出来上がった。召喚したサーヴァントに人格を上書きする形で再現した」

「それは、つまり敵側には冬木市全人口分のサーヴァントがいるということですか……!?!」

マシユの驚愕は最もだ。今まで、そんな数のサーヴァントを相手にしたことなどほとんどない。戦力差は絶望的と言えた。

「もちろん、全てが先ほどのバゼット・フラガ・マクレミッツのような強さではない。間桐桜にとってキーパーソンとなる人々のみが正規のサーヴァントを材料にしている。ほかは皆、シャドウサーヴァント。もしくは君たちのカルデアから召喚されたサーヴァントたちだろう」

シャドウサーヴァントを基にして再現された人々は決まった行動を定められた場所で行えないという。正にNPCという表現がぴったりくる。

そしてカルデアから召喚されたサーヴァントというのは、午前中になぜか教鞭をとつていた北斎ちゃんやレオニダスたちのことだろう。

「彼らも敵に回る可能性がある。間桐桜にはサーヴァントを黒化させて操る能力がある。エーテル体にとって天敵だ」

状況としては、かつてのアガルタで起きたことに近いだろうか。決戦兵器とも呼ばれる彼らサーヴァントは頼りになるが、同時にサーヴァント故の弱点も抱えている。エーテル体の身体というのは、その最たるものだろう。

「サーヴァントを操ることができるといっているのは分かったけど、でもだとしたらどうしてエルメロイⅡ世や遠坂さんはこうして自分の意思で動いているの？」

彼らもまた間桐桜に召喚されたサーヴァントだと言うのなら、そのマスターに反抗している現在の状況は辻褃が合わない。

「そこで先の話に戻る。言っただろう、彼女は正気ではないと」

時計塔の講師は語る。その少女は、微睡の中に沈んだのだと。

「間桐桜は、十年前に戻りたかった。しかし本当の意味で十年前に戻るには、それまでの記憶を持っているのは都合が悪い」

間桐さんが望んだのは、かつての日常。その日常をあらゆる憂いなく享受すること。

「有体に言って、彼女は己の所業に耐え切れなかった」

だから、彼女は記憶を捨てたのだ。

「彼女は幾人かのサーヴァントに対してこの世界の秩序を維持するように命令したあと、自分自身の2004年から2014年までのあらゆる記憶を焼却した」

不都合な真実から目を背け、彼女は眠りに就いた。偽りの幸福を映す白昼夢の中に身を投げた。

「マスターであり、聖杯そのものである間桐桜は眠りについた。管理を任されたサーヴァント——仮にこれをGMサーヴァントと称するが——彼らの管理は、最初のうちは上手くいっていた。けれど、予想外の事態が起きた」

「私たち、カルデアからの干渉ですね？」

時計塔の講師は、「その通りだ」と首肯した。

「君たちのエントリーは、ただでさえカツカツだった聖杯の処理能力



をパンクさせるに至った。GMサーヴァントたちは、聖杯のリソースを効率化してこの世界を維持させたが、一度できた綻びはそう簡単に戻らない。私とミス遠坂は、その綻びから記憶を取り戻したわけだ。それでも万全ではないがね」

GMサーヴァントらは、限界に至ったりリソース確保のために思い切った手段をとった。

「奴らは聖杯のリソース分配に勾配を付けることで現状に対処した。間桐桜の周囲にリソースを割り、それ以外はおざなりな状況にしたんだ」

テレビゲームを想像すればいい、と彼は語った。

「はじまりの街の中にいる主人公を映しているときに、まさか魔王城の光景を映したりはしないだろう。もしくは、遠景のポリゴンは近くのものより大雑把な仕上がりになっているのを想像してくれればいい」

昼間では、間桐桜は学校で活動しているもののアグレッシブに動くこともあることから、そこまでリソースの勾配をつけることはできない。だが、夜中は違う。夜の間、間桐さんは衛宮邸にしかいない。その間、衛宮邸の外は2014年の冬木市に戻るといわけか。

遅まきながら、白き少女の忠告を思い出す。彼女は言っていた。もうじき夜が来ると。

「だからこうして、我々は夜の間だけは自由に行動できる」

「ということとは、昼は無理なんですか？」

「ああ。昼間はこの冬木市全体にルールが適応されている。私もミス遠坂も、記憶を維持することさえできない。夜になれば、それまでのことも含めて思い出せるがね」

これはかなりきつい縛りだ。一日の半分を無駄にしなければならぬし、その上昼間は記憶を維持することさえできないなんて。

「だが、君たちならば昼の縛りも脱することができるはずだ」

そうだろうか？ エルメロイII世が中空に声を投げる。すると、見慣れた映像が空間に投影された。

「ダ・ヴィンチちゃん!」

「やあ。元気かい、マスター？　こちらはしばらく通信が繋がらなくてだぶやキモキしていたんだが、その調子だと大丈夫そうだね？」  
どうやら僕が眠っている間に、カルデアとの通信が回復していたらしい。今までは現状の理解に努めるべく、エルメロイⅡ世の話を遮らないよう黙っていたようだ。

「それでも、一言声をかけてくれればよかったのに……」

「それについては申し訳なかったね。でも、時間が限られているからね。どうしても優先事項である現状の確認から行いたかったんだ」

申し訳ないと謝って、ダ・ヴィンチちゃんは続けた。

「こちらで、再度マスターを補足できた。これでもう見失うことはないはずさ。存在証明の応用で、昼間の間でも君とマシユは記憶を維持できる」

ダ・ヴィンチちゃんら、カルデアのスタッフの心強いサポートでうにか光明ができてきた。

「さあ、ここからが本番だ。我々の勝利条件を確認しよう」

僕らの勝利条件は、聖杯を回収することだ。そしてこの特異点を解決することだろう。

「しかし、聖杯に手を出して、下手に間桐桜を正気に戻してしまえば、この冬木に召喚された全てのサーヴァントが敵に回る。それどころか私とミス遠坂も自由意思を失うだろう」

「カルデアからの応援も難しい。サーヴァントを追加で送ろうにも、その特異点の中じゃ契約に横やりを入れられかねない。現に、今そうなっているわけだしね」

僕とマシユの二人きりで、現地サーヴァントとも分断されて孤立無援なんて想像するだけで恐ろしい。一足飛ばしに話を進めることはできなさそうだ。

「だから、まずはGMサーヴァントの撃破を優先する。今聖杯を管理しているのは奴らだ。間桐桜を眠らせたまま聖杯を回収できることが望ましい」

「GMサーヴァント……。あのバゼットさんも、そうなんですか？」

正気を失ったバーサーカーのデミ・サーヴァント。先刻、僕とマ

シユを撃破せしめた彼女は依然、脅威のままだ。

「ああ、そうだ。まずは彼女をどうにかせねばならん。恐らくは神靈級のサーヴァントだ。我々だけでは太刀打ちできない」

昼の間は僕とマシユ以外は記憶を失ってる状態で、夜の間もロードと遠坂さんが戦力になるくらいだ。これ、八方塞がりなんじゃ……？「厳しいですね……。普段なら、現地で協力してくれるサーヴァントを探すのですが……」

そう言い、頭を抱えるマシユに対し、エルメロイⅡ世は言った。

「いや、その通りだ。現状の戦力で太刀打ちできないなら、協力者を探せばいい」

「いやでも、この特異点じゃあ皆、記憶を失っているんじゃない……」

そこで、エルメロイⅡ世は自らを指さした。

「私たちもそうだろうか？　だが少なくとも夜の間は、聖杯の支配から脱することができている」

「ああ!!　確かに!!」

「サーヴァントへの聖杯による縛りは、現在綻びができています。我々同様に、何かきつかけさえあれば、記憶を維持して夜の間にも活動できる。それを偶然に頼らずに、君たちになしてもらいたい」

強い光を瞳に宿して、ロード・エルメロイⅡ世は僕を射抜いた。

「君たちには、昼の間に力になりそうなサーヴァントを見つけて、記憶を取り戻すきつかけを与えて欲しい」

光明は、見えた。まずは昼間のうちに協力してくれるサーヴァントを見つけて、記憶を取り戻させる!!

やることは把握できた。決意を胸に秘めていると、部屋を出て行った遠坂さんが戻ってきた。

「その顔を見るに、話はまとまったみたいね？　もうすぐ日の出よ。世界のテクスチャが書き換えられる」

ザザッザザッと世界にノイズが走り出した。

「う、うわっ」

「落ち着きなさい。別になんてことは無いから。……昼間の私たちは何も覚えてないだろうから、きつと力になれない。私たちの不始末の

尻ぬぐいをさせているようで申し訳ないんだけど。冬木市の管理者として依頼するわ。どうか、この世界を終わらせてほしいの」

ノイズが走り、再び2004年の冬木へと書き換わっていく中、遠坂さんの声が聞こえた。

そうして、朝焼けとともに世界は再び巻き戻った。

## e p 5 槍兵とそのマスターと

「おはようございます。先輩」

布団の温もりから、その声で脱する。聞き慣れた、僕を先輩と慕う少女の声だ。

「……おはよう、マシユ」

「はい。……その様子ですと、記憶の方は大丈夫そうですね」

一安心と言った風に、胸に手を当てるマシユ。その時に彼女のマシユマロがマシユマシユと揺れる。おおう、朝から刺激が強いや。

「うん。昨日までの記憶はきちんと残ってる」

畳の部屋。壁に掛けられた穂群原学園の制服に勉強机と、どうやら朝になれば強制的に衛宮邸にリスポンするらしい。

「それじゃ、始めようか」

決意は胸に。いつだって前に進むのが僕の仕事だ。平凡な日常に紛れて、僕らの戦争が幕を開けた。

とはいえ。

「こうして学校に通うっていうのも、危機感が感じられないような」

「どうした、藤丸？」

首をかしげる衛宮に、何でもないと行って会話に混ざる。

場所は教室。HR前の雑然とした時間だった。衛宮に後藤くんらとともに、益体もないことに話の花を咲かす。

ダ・ヴィンチちゃんとホームズが言うには、間桐桜を変に刺激するべきではないということだった。つまり、日常を崩すような真似は極力避けるべきという方針だ。確かに、今間桐さんに正気に戻られても成す術がない。その方針は間違いじゃないが、やはりどうしても落ち着かない気持ちになる。

当然、僕とマシユが学園生活を送っている最中に、カルデアではスタッフ総出で昨晚のバゼットさんの正体を突き止めるべく動いている。今は座して待つ、忍耐の時だ。

それにしても、と思う。

今朝に見た間桐さんを思い出す。真実を聞いてからもなお、あの可憐な少女が今回の黒幕で、既に正気を失っているとは思えなかった。記憶を消しているのだから、当たり前なのだろうけど。

「やっぱり、女つてのは見た目じゃ判断できないってわけだな!! な、藤丸!!」

「ううええ!! ……まあ、その通りだとは感じているけれど」  
考え事に妙にシンクロする問いを掛けてくる後藤くんにびっくりしつつ頷いた。不味い不味い、ぼうつとしてた。

「そうそう、あのタイガーだって、黙ってれば真面だけど中身があれじゃあなあ」

「——へえ?」

あ。終わったな。

うんぎやああああああああ、と後藤君の悲鳴とともに、幾度目かの日常が始まった。

そういうわけで、放課後。

僕はマシユとともに、商店街へと続く道を再び訪れていた。

「ここに、本当に現状を打破するための鍵があるの?」

『うん、その通りさ』

自信ありげに頷くダ・ヴィンチちゃん。疑うわけじゃないんだけど、このどこにでもあるような商店街に本当に逆転の切り札があるんだろうか?」

「……まさか、お昼のうちにバゼットさんを……?」

『いやいや、そんなことはできないしさせないよ』

そんなことしたら、間桐桜が目覚めてしまうかもしれないだろう? とダ・ヴィンチちゃん。それもその通りだ。いけない、どうにも気が逸りすぎている。

『それに、そもそも昼の段階でも彼女に勝てるかどうかは怪しいもんや』

「それは、どういうことでしょうか?」

いかに弱体化しているとはいえ、マシユはデミ・サーヴァントだ。

時計塔の魔術師だという彼女でも、昼の状態を相手にマシユが敗北するまでは考えられない。

『昨夜のうちに、この特異点の過去に起きた第五次聖杯戦争にまつわる情報は粗方彼らから提供されていてね。……なんでも、そのバゼット嬢はただの魔術師ではないらしい』

そうしてダ・ヴィンチちゃんによって語られたのは、信じがたい彼女のパーソナルデータだった。

バゼット・フラガ・マクレミッツ。

単なる時計塔所属の魔術師と言うよりは、封印指定執行者としての彼女の方が有名であつたらしい。

「ふーいんしてー?」

『あー。藤丸君には馴染みのない単語だよね』

ダ・ヴィンチちゃんとマシユによる解説によれば、封印指定執行者とは時計塔に仇成す敵性魔術師や神秘の秘匿に反する魔術師に対し、強制介入し事態にあたる時計塔屈指の武闘派であるらしい。

「対象の魔術師だけでなく聖堂教会からの代行者との戦闘も熟すことのできる、現代時計塔の公式な最高峰戦力。それが封印指定執行者です。単に執行者とも呼ばれますが」

『まあ、有体に言えば、人類最強みたいな感じかなあ?』

そんなバリバリの武闘派である彼女は、時計塔からの命でランサーのマスターとして第五次聖杯戦争に参戦した。しかしいち早く——と言うよりも始まる前に、彼女は舞台から退場したらしい。

『本来は監督役であるはずの言峰綺礼のだまし討ちにより、令呪を奪われ脱落したらしい』

その彼女は、しばらく生死の境を彷徨うも一命は取り留めたらしい。そしてリハビリの末に復帰し、十年後の今、リベンジもかねてロード・エルメロイⅡ世らとともに大聖杯解体のためにこの冬木に來日していたのだという。

『問題なのは、彼女の持つ宝具でね』

伝承保菌者。それもまた僕にとっては聞き慣れない言葉だった。なんでも彼女は現代に伝えられたある宝具の正統使用者であるらし

い。

マシユとは異なり、ただ人の身で宝具を操る。それを聞いただけでも、バゼットさんが一廉の存在であることが伺える。

「あの短剣。不完全とはいえ私の宝具を貫いて見せた、あれが……？」  
珍しく悔しそうにマシユが言う。

『そう。あれが、バゼット・フラガ・マクレミッツが扱う現存する宝具。斬り決る戦神の剣さ』

別名・後より出て先に断つ者。もしくは逆行剣とも。

ケルトの光神ルーの短剣。対峙する敵の切り札の発動を条件に、自らの攻撃を先に成したものとする因果歪曲・順序逆転を齎す『時を逆行する一撃』。その一撃を持って、敵の攻撃を起きえないものにしてしまふ、相討ちを一方的な必殺へと変換する魔剣。

『その宝具を依り代にして彼女の核とされているのは、恐らく光神ルーだ。大きく神格を落としているし狂化されてもいるがね』

「光神ルー……!? そんな、ケルト神話における太陽の神ですか!？」

おおよそ、最悪の情報ばかり積み上げられていく。カウンターの極致に太陽神。相手取るにはあまりに強大だ。

『だが、光明はある。これだけ情報があれば対策の一つ二つなんて、天才ダ・ヴィンチちゃんに思いつけないはずがない』

ダ・ヴィンチちゃんは語る。倒せぬ敵ではないと。

『ランサー・クー・フリーンを味方につけよう。彼の宝具ならば、彼女の宝具を打ち破れる』

こうして最初のミッションが定まった。英雄クー・フリーンを味方につけよ。かの大英雄にマスター殺しを、親殺しをさせろ、と。

「でも、実際問題さ」

商店街へと続く道には珍しく人影はない。だからこうしてマシユ、ダ・ヴィンチちゃんと他人の目をはばからず会話できる。

「あのクー・フリーンに、マスターであるバゼットさんを倒してなんてお願いしても、聞いてくれるかな？」

ケルト神話における大英雄。クランの猛犬ともいわれる長身痩躯、



しなやかな肉体の槍兵。

現在の冬木では魚屋のアルバイトのにいちやんであり休日にはアロハを着込んで海釣りに出向く姿が目撃されている、気のいい若者として通っているとか。

魔術師として——ドルイドとしての彼とも、最初の特異点で僕らは遭遇しているが、その時でもそのパーソナリティは変わらない。コミュニケーションの取りやすさで言えば、サーヴァント全体でも屈指であるだろう。

「確かにクー・フリーンさんは話の通じる方ではありますが……。現在、冬木に召喚されている『ランサーさん』は、カルデアにいる、先輩のサーヴァントとしてのクー・フリーンさんではありませんから」マシユの言う通りだ。彼は、誉れ高き赤枝の騎士。誓約——ゲツシユと呼ばれる文化を持つケルト神話の英雄。そんな彼が、この時代におけるマスターのバゼットさんに、その槍の穂先を向けることが果たしてあるだろうか。

『それについては恐らく大丈夫さ。何せ、カルデアのクー・フリーンのお墨付きだからね』

「夜になりや、契約も切れてるんだろう？ サーヴァントとサーヴァントじゃそもそも契約できねえしな。……なら大丈夫だ。俺なら、何の説明もなくても記憶さえ取り戻せたなら必ずやる」

何せ、あの夜でもそうしたからな。  
本人曰く、そういうことらしい。

「でも大丈夫かな。ルーつてクー・フリーンの父親みたいなものなんでしょ？」

バゼットさんに対して槍を向けることを許容できても、父親（と呼べるかどうかは逸話を聞いた限りでは判断できないけど）に槍を向けるなんてのは。

『それについても大丈夫だってさ。狂化されているその状況なら、いっそ介錯してやるって』

流石は赤枝の騎士。その辺の割り切り方も常人のソレじゃない。

「あとは、どうやってランサーに記憶を取り戻してもらうか、か」

「あん？ オレの記憶がどうしたって？」

「うわったあ!!?」

気づいたら魚屋のエプロン姿のランサーが背後に立っていた。

「え、えつと。どこから聞いてたの？」

「どこから……う？ 何だ、坊主、何かオレに隠し事でもあるのか？」

不思議そうに尋ねるランサー。この様子だと、大事なところは聞かれてなかったみたいだ。

「いや。何でもないよ」

そう言つて、耳につけたイヤリングを触る。今回の特異点では、いつものような空間投影型の通信は目立つということ、このイヤリング型イヤフォンで音声のみの通信をしているのだ。なお、本来はハンズフリータイプの普通のイヤフォンのはずだったが、2004年には存在しないのでイヤリング型に急遽変更したのである。流星はダ・ヴィンチちゃん特製イヤフォン。魔術にも精通するランサーに氣取られた様子はな——

「おおおう？ 何だそのイヤリングは。お前さんも色気づく年頃かア？」

快活に笑うランサー。ビビったあ、気づかれたと思った……。

「い、いやあ。あはは……。ちよつとお洒落に目覚めてね」

どう？ 似合ってる？ とランサーに問う。さり気なく話題を転換する技術である。清姫とか静謐のハサンとか頼光さんあたりにこの技術は大いに鍛えられた。

「イヤリングつて、どつちかつつと女物じゃねえのか？」

「ピアスは耳に穴を開けなきゃいけないし」

「んっは——それでも男かお前さんは!!」

呆れるような仕草のランサーに、そんなこと言われてもと返す。いやだつて、怖いもんは怖いんだよ。

「大丈夫ですつ、先輩。私はとてもよくお似合いだと思えます」

『世界を救ったマスターとは思えない言い分だねえ』

フォローありがとう、マシユ。そしてバレちゃうかもしれないんだから自重してくれダ・ヴィンチちゃん。

「ま、外見に気を遣うようになるだけまだマシなのかねエ。ウチのマスターときたら、そのあたりは点でダメだからな」

ドキリ、と心臓が跳ねる。ランサーのマスターときたら――

ランサーの視線の先を見やる。そこには、昨夜の暴虐を思わせる赤髪の女性が、

「なにしてるの」

自販機の下で小銭拾いをしていました。

「人間、追い詰められて余裕がなくなると他人からどう思われるのかつつう視点が抜け落ちるんだ。あれがいい例だな」

「いやうん。お洒落以前の問題じゃない?」

外見に気を遣うってそういう? 予想以上に低次元だよ、大丈夫か時計塔。

どうやらこちらに気づいたらしいバゼットさんが、むつつりとした表情でこちらにやってきた。何でだろう、さつきまで怖かったはずなのに、今ではどちらかと言うと恐怖より憐みの感情が……。

「なんですランサー。私の方を見て、何か言いたそうにして」

「いや、言いてエことだらけだわ。もうちよい他人の目を気にしてくれ、マスター」

使い魔に養われている状態が許せなくて働き始めたはずのバゼットさんだが、最初の目的はどこへやら。今では、『働く』よりも『お金を得る方向へ思考がシフトしているらしい。』

「ランサー。他人の目を気にしても金銭は得られません」

「高々百円程度で人間性を捨てるなつつう話だ!!」

ぐぬぬ、と黙るバゼットさん。いや、何でそこで言い返せると思っ  
ているのか。

「ハア……。全く、ウチのマスターときたら。坊主を見習って、少しは見た目に気を遣えってんだ」

「いや、ファクションの話じゃないでしょ。生き方の話でしょ、これ」  
これと比べられても困る。

「外見については、言うほどでもないでしょう? スーツですから。フォーマルな格好です」

無然と返すバゼットさん。逆にスーツで地面を這いつくばるって  
どうなんだ。

「……そう言えば、バゼットさんの服装は基本、スーツですよね。……  
というか、普段スーツを着ている姿しか見たことがないような」

マシユの口から出た疑問にバゼットさんが答える。

「スーツ以外に服を持っていないわけではありませんが——なんで  
す、ランサーも藤丸君もその目は!! 流石に持ってますから!! 私、  
そんなにズボラに見えますか!?!」

「いやまあ、生真面目で不器用で生きるのだけで精一杯みたいな雰囲気  
氣してますとしか言えないですね」

「だな」

「クウ……!! どこかの誰かに過去にも言われたような言葉を吐きま  
すね……!!」

ハンカチでも噛みそうなバゼットさんをかばうようにマシユが口  
を開いた。

「もう、先輩もランサーさんも言いすぎです。女性の方が、そのような  
ことを男性に言われるととても傷ついてしまいますよ?」

「ご、ごめん、マシユ」

マシユにそう言われると弱い。

「バゼットさんもおしゃれに無頓着というわけでもないのでは? そ  
の耳飾りだってお洒落の証拠です」

マシユの指さす耳飾り。バゼットさんの耳につけられたそれは、あ  
まりに自然に彼女に馴染んでいるものだから、すっかり見落としてい  
た。

「ああ、本当だ。その耳飾り、バゼットさんに似合ってますね」

言われて、彼女は自身の耳に手をやった。

「——ああ。これは、他人から見ればお洒落なのでしょうが」

彼女の耳を彩る銀の耳飾りには、既視感がある。というか、すぐ  
さつき見たような……?」

「それ、ランサーさんとお揃いなんですか?」

僕よりも先に気づいたマシユが問う。

「お揃いといえば、そうなんでしょうか？　これは、ええと、ルーンが刻まれた石というか、魔よけというか」

言葉を濁すバゼットさん。ああそうか、彼女は僕らが魔術に通じているとは知らないのか。

「うーん、バゼットさんの故郷に伝わる古いお守りってこと？」

それとなく助け舟を出すと「その通りです」と彼女は頷いた。

「ま、そんなところだな。……そうだ、坊主。お前さんにも一個やるよ」

言つて、ランサーは懐から同じような銀の耳飾りを取り出した。

「貰ってもいいの？」

「ああ。大した効果はないだろうが、うん。ケルトの戦士の勘だ。こいつは、お前が持つておけ」

その後彼は「もう仕事に戻る」とだけ言つて店に戻つていった。バゼットさんもまた、バイトの面接があるとかで、同様に去つていったのだった。

「行つちやつた……。どうしようかな……」

『よし、戻ろう。マシユに藤丸君。これで仕込みは成つた』

「え？」

ダ・ヴィンチちゃんには既に光明が見えているらしい。いつもの得意顔で、彼女は言い放つた。

『説明は後で——さあ、今夜が勝負だ。あの墜ちた神に引導を渡してやろう』

## e p 6 ある主従の決着

夜の帳は落ち、女神の臉は閉じられた。ここからは、再び僕らの日常——つまりは非日常の時間だ。

『あの銀の耳飾りについてだけどね』

先ほど、仕込みは成ったと言い放ったダ・ヴィンチちゃんの言葉を聞きながら、件の耳飾りを手で弄ぶ。

『ルーンこそ刻まれているその耳飾り自体は、さして問題じゃない。この冬木市でかつて呼び出された『ランサー』としての彼の触媒が耳飾りだった。そのことが重要なんだ』

昨夜に出会ったエルメロイⅡ世から齎された、この特異点での過去における第五次聖杯戦争の詳細レポートには、召喚されたサーヴァントたちの細かなスペックのほか、召喚に用いられた場所や触媒なんかも記されていたらしい。神経質な彼らしい仕事だ。

『そのレポートによれば、バゼット・フラガ・マクレミッツは家に伝わるルーンの耳飾りを用いてランサーを召喚しているらしい。つまり、今回『ランサー』にとって、触媒となった銀の耳飾りは重要なファクター足り得る』

難しいことは、素人同然の僕にはよく分からなかったけれど、いわばこの銀の耳飾りはこの特異点における『ランサー』と僕らとを結びつける触媒となるらしい。

そつと、力を入れてそれを握った。

「緊張してるみたいね」

隣に立つ、遠坂さんが告げる。

「そりゃ、ね」

昨日の敗北は、どうしようもなく脳裏にこびりついている。刻み付けられた恐怖はそう簡単には消えてくれない。

それは、マシユも一緒なのだろう。忙しなく手を握ったり開いたりしている。そもそも今の彼女は、本来のスペックを引き出しきれていないのだ。

時空神殿での戦いの後、彼女はサーヴァントとしての形態を維持し

ていることすら難しくなってきた。そんな状態でもう一度、あの暴走状態のバゼットさんと戦わなくてはならないのだ。きつと、彼女の感じている焦りは想像以上のものだろう。

「大丈夫。うん、きつと」

マシユの手を握る。今の僕には、これくらいしかできない。

「……っ。は、はい。先輩」

手の感覚が、いつも以上に鋭敏だ。こんなにも彼女の体温を熱く感じる。遠坂さんの「熱いわねー」なんて冷やかさも今は聞こえないくらいに、集中していた。

「……——来たっ!!」

エルメロイⅡ世の声で、意識が切り替わる。

場所は、再び穂群原学園の校舎だった。暗がりの中、数多のシャドウサーヴァントを引き連れて、バーサーカー／バゼット・フラガ・マクレミッツが幽鬼の面持ちで姿を現した。

「グガ……ぎ、グガアアアアアアアアアア!!!!」

雄たけびとともに、彼女が駆ける。

マシユは戦力には数えられない。エルメロイⅡ世の石兵八陣は、その膂力で容易に打ち碎かれるだろう。遠坂さんについても、もはや彼女の得意とする距離ではない。そもそも彼らは己が靈基を使いこなせていない。カルデアでの彼らと同じように考えていると足元をすくわれるだろう。

でも、

「——応えてくれ、ランサー!!」

右手に握りしめた銀の耳飾り。それを触媒に、かの槍兵を呼び起こす。

「——ハア!!」

ガギンツと、赤枝の槍と鋼鉄の拳が打ち合う。

「グ……ア……!?!」

「ったく。大分無様を晒してるみてえじゃねえか、マスター」

いや、元マスターだったな。

幾ばくの感情とともにそう吐いて、彼はその膂力で彼女を吹き飛ば

した。

「状況の説明、なんて悠長なことを言っている時間はねえみてえだな」  
僕の隣に、彼が立つ。

「うん、ごめん。本当はもうちよつと余裕を持ちたかったんだけど」  
『意識の途切れた君を夜の間に呼び起こすには、君自身から貰った触媒のほかにも、元マスター——君を現世に呼び寄せた強い縁を持つ、バゼット自身が必要だね。こんな土壇場で召喚するしかなかったってわけだ』

僕の言葉を補うように、ダ・ヴィンチちゃんの説明が入る。

要は、昼間にランサーから手渡された銀の耳飾りと、第五次聖杯戦争でランサーを召喚したマスター、バゼットさんの両方を揃えることで、ランサーをこの夜に召喚しなおした——冬木の大聖杯との間に割り込んだというわけだ。

吹き飛ばされたバゼットさんを視界に収めつつ、ランサーは溜め息をついた。

「何が何だか訳が分かんねえ。魚屋の店員をしていたと思ったら次の瞬間には戦場と来た。おまけに相手は、正気じゃねえ元マスターだしよお。隣にやサーヴァントになった嬢ちゃんらときたもんだ。てか、オレ自身の記憶も怪しいしよオ。たまんねえなあ、オイ」

だがよ、と彼は続けた。

「訳も分かんねえまま戦場に来るなんざよくあることだ。——何よ、アレは見てられねえ」

視線の先、狂ったかつての主を見て、彼は何を思うのだろう。

「おい、坊主」

「う、うん」

視線は油断なく敵を見据えたまま、彼は口を開いた。

「テメエが今のマスターだって、認めてやる。だから、命令しろ」  
一つだけ呼吸をして、答えた。

「ああ。行け、行ってくれランサー。どうか彼女を止めてくれ!!」

※



復帰したバゼットさんが立ち上がると同時に駆けた。

向かう先は、赤槍を携えた青き槍兵。

振るう拳は鉄の如し。ルーン魔術によって強化されたその鉄拳を連続して、ランサーへと叩き込む。

「チィ」

舌打ち一つ。

バックステップをし、距離を取ったランサーが細かく器用に槍を当て、いなしていく。

穂で、柄で、魔槍のあらゆる部分を使いながら彼女の一撃を弾いていく。

「ランサーが、押されてる……?」

湧き出るシャドウサーヴァントを迎撃しつつ、僕らは二人の戦闘を見やる。嘘だろ、戦上手の彼が防戦一方だなんて。

「技術自体はランサーの方がよほど上だが。やはりGMサーヴァントとは出力が違いすぎるか」

苦い表情でエルメロイⅡ世が独り言ちる。

冬木の大聖杯からバックアップを受けているバゼットさんと、聖杯からの支配から逃れ、カルデア側と一時的な契約状態である彼では、霊基の強度・出力が違いすぎる。言ってしまうえば、バゼットさん側はフェラーリで、ランサーは軽自動車で競い合っているようなものだ。「ハッ!!」このくらい逆境、大したことはねえ。誓約破ったときよりはよっぽどマシだ」

当てた槍でバゼットさんを押し返し、強引に距離を取る。

「グガアアアアツツ!!」

バゼットさんが、再び前進する。狂化し理性を失った彼女には、もはや前に向かう以外の選択肢は存在しないようだ。己の体制も整わないまま、スペック任せのゴリ押しにでた。

距離を詰めるバゼットさんと、距離を取りたいランサー。

インファイトの射程圏内では十分にその長槍は振るえず、宝具の真名開放を行う時間もない。

「このままじゃ不味いわね……」

こちら側も、言うほどの余裕はない。エルメロイⅡ世も遠坂さんも自身の霊基を使いこなせていないし、そもそも彼らの出力も大きく減退している。シャドウサーヴァントを散らすので手一杯だ。

「ランサー!! どうにか距離をとって、宝具の開放を!!」

「分かってるよ!!」

手の甲の令呪を見やる。残り三画。切るタイミングは――

「オラアツ!!」

再び、強く弾く。そして、ランサーは攻勢に転じた。

「アンサズ」

ルーン魔術。弾かれてなお距離を詰めようとするバゼットさんに、ルーンの一撃が襲う。

「グガア!?!」

「考えなしの獣並みだ。理性どころか本能さえ真面に働いてねえと見える」

ランサーの体制は整った。バゼットさんは、足元がふらついている。攻勢には出られない。

――ここだ。

「ランサ――!!」

「いいタイミングだぜ、坊主」

手の甲が、熱く輝く。足りない出力を令呪によって補う!!

「刺し穿つ――」

槍兵が、その魔槍を構え、走り跳ぶ。闇夜に浮かび、その槍激を振りかぶった。

しかし宝具解放を見て取ったバゼットさんもまた、その切り札を切った。

「……あんざらー」

円卓の盾さえ打ち破って見せた、究極のカウンター宝具。その短剣を振りぬいた。

「――死棘の槍!!」

軌跡は鮮やかな赤の残光。

「……抉り斬る、戦神の剣!!」

軌跡は醒めるような銀の光輪。

果てまで届くような、赤と銀の幻想の光。だが、貫いたのは――

「ガフツ……」

バゼットさんの胸には風穴が空いていた。

「後の先を当て、敵方の攻撃をキャンセルさせることで成立させる究極のカウンター宝具。彼女の宝具に対して、因果を逆転させるランサーの宝具は天敵足りうる。ああ、ぶっつけ本番だったが、上手くいったか」

一安心だ、とエルメロイⅡ世がため息とともに漏らした。うわ、確証無かつたんですね……。

貫かれた彼女を見やる。足取りはすでに覚束なく、されど先ほどまでの狂相はもはやない。僕らの知るバゼット・フラガ・マクレミッツが、目の前にいた。

「らん、ヤー………?」

流れ出る血は、致死量を超えている。いかに今の彼女がサーヴァントであろうとも、もはや消失は避けられないだろう。

「ああ、ごめんなさい……。私、願ってしまった。もう一度、貴方に」

「あー、もう喋るなマスター……。アンタの想いも願いも無念も、全部判ってるから」

マスターとサーヴァント。僕らには、彼らがどんな道を歩んだのかは分からないけれど、きつとバゼットさんにとっては後悔の残る戦いだったのだろう。その残念に彼女は抗えなかったのか。

「……遠坂さん、エルメロイⅡ世、すみません。足を、引っ張ってしまった。それに、異界のマスター。あなたにも多大に迷惑を、かけてしまった」

血反吐を吐きながら、彼女は懺悔した。

「仕方ないわ。……そもその原因は、私にあるのだしね」

「そう、言ってもらえると、肩の荷が軽くなります……。ああ、本当に、愚か。どうして、忘れてしまったのか。あの、繰り返し夜を覚えてさえいれば、こんな失態を晒すこともなかった、のに。ねえ、――」

最後の言葉。誰かの名前を呟いたのだろうか。僕らには、聞き取ることはできなかつた。青の槍兵の胸に抱かれて、男装の麗人は消え去った。

懐から煙草を取り出して、エルメロイⅡ世が言った。

「これで、バゼット・フラガ・マクレミッツはこの世界から退場した。もう、昼にも出てくることは無いだろう」

偽りの日常に、もう彼女の居場所はない。誰も彼女がいらないことに違和感を覚えない。そう思うと、とても寂しかった。

「気にしちゃダメよ、藤丸くん。それは、心の贅肉だわ」

「分かっていますよ。……でも、彼女の死さえ泡沫の夢であっても、悼んじやいけないなんてことはないでしょう?」

消え去った彼女が居た場所には、金色の輝きだけが残っていた。

「これが、聖杯か?」

ランサーは残された黄金を手を取った。

「いや、それはあくまで欠片だろう。彼らGMサーヴァントは皆、この欠片をそれぞれ管理しているわけか。……各個撃破していくしかないな」

「あんなのが、あとどれくらいいるんだか。気の遠くなる話だな、こりゃ」

「そうだねえ。ほんと、気が遠くなりそうだ。僕らに勝とうだなんて  
さ」

闇夜の舞台に躍り出たのは、新たなる英霊。

右手に鎌を、左手には大楯。腰に尋常ならざる袋を携えた、深い青の外套を身に纏う細身の青年だった。

僕はその名前を知っている。

「まとう、しんじ……」

偽りの夜。微睡の舞台。まほろばの世界にて、第二の幕が静かに下ろされた。

e p 7 在りし日の友よ、今は

月夜の校庭に姿を見せた、二人目のGMサーヴァント。

大鎌と盾を携え、腰には神秘を纏う布袋を備えた優男。そして昼の世界においては、僕らの同級生だった憎まれ口の少年。

「まとう、しんじ……!!」

「それは昼の名前だな。——今の僕は、サーヴァント・ライダー。我が真名を、ペルセウス」

ペルセウス。

ギリシャ神話における大英雄の一人。怪物と成り果てたメドウーサを殺した逸話のほか、巨人アトラーズ討伐やディオニユソスとも戦ったという逸話が残る、紛れもない大英雄……!!

「慎二!? 何だってアンタがそっち側にいるわけ!」

驚き食って掛かる遠坂さんにペルセウスが答えた。

「だからシンジじゃなくてペルセウスだって……。まあ、何でもいいさ。そんなことは」

——だって、ここで死ぬんだし。

言って、彼は地を蹴った。

かろうじて反応したのは、やはり最速のクラスに属する英雄、クー・フリーン。

だが、

「速え!?!」

ペルセウスはランサーが槍を振るうまでに三度地を蹴り、軽やかに空に転じた。そのまま僕らの背後、エルメロイⅡ世の首にその大鎌を

「させません!!」

マシユがその円卓の盾をかざす。鎌と盾が打ち合う音が甲高く。しかし一拍のうちに一度二度三度と振るわれる大鎌の衝撃にマシユの重心が浮いた。

「ぐう……!!」

「胴体、がら空きだっ!!」

浮ついた大楯を割けて、鎌が迫る。外から内に入る、鎌の特異な刃の付き方を生かした斬撃。盾の裏に黒塗りの刃が奔る。

「Anfang!!」

遠坂さんの右手人差し指から、閃光が行く。ケルトの呪い、ガントが狂刃をわずかに逸らした。

「よくやった嬢ちゃん!!」

再び駆けるは、青き克蘭の猛犬。次は逃がさぬと赤き呪槍を最短距離で届かす。

「チィ!!」

ランサーの踏み込みに、しかしその騎兵は機敏に反応して見せた。

噛みつこうと追うランサーを盾で難なくあしらって、騎兵は優雅ともいえる所作で後退した。

「腐っても大英雄か。出力不足といえども、その槍の冴えは見事だな」  
「テメエこそ。聖杯の加護つてのは余程のものらしいな。まさか今の  
が避けられるとは思わなかった」

昼の慎二からはとても想像できない身のこなしに、僕も認識を改める。目の前の彼は、正しくサーヴァント。歴史に名を残し大英雄だ。慎二のままだと考えてると足元を掬われるだろう。

「ギリシヤ神話の英雄ペルセウス……。極めて有名で、強力なサーヴァントです……!!」

『その通りだ、マシユ。知名度トップクラスのサーヴァントに加えて、聖杯の加護がある。真正面からじゃ勝ち目がないよ!!』

「ダヴィンチの言う通りだ。ここは撤退するべきだな」

ダヴィンチちゃん、孔明の頭脳担当二人の撤退判断は正しい。だが問題なのは、

「ふーん？ 勝ち目無いつてのは正しい判断だけど。——逃げられるって判断は間違ってるよね？」

「ハアッ!!」

ランサーが攻勢に出る。判ってる、彼は殿を買って出たのだ。あのライダーにどうにか対応できるのは、この場において彼だけだ。

「ちよこまかうざいんだよ!!」

大鎌が振るわれる。

大振りになったそれをランサーは距離を詰めることで躲して見せた。

先ほどの戦闘で、ランサー相手にバゼットさんがして見せた、相手の懐に飛び込むスタイルだ。

「槍兵が距離を詰めるなよ!？」

驚くペルセウス。嗤う克蘭の猛犬。

片手で、槍の穂近くを握って突き出す。

鋭く抉るような一撃を、騎兵は大楯で防いだ。

「グウ……!!」

だが咄嗟の判断でのそれは、真正面から槍の一撃を受けた。衝撃を殺しきれず、ペルセウスの体制が崩れる。

「今!!」

「石兵八陣!!」

遠坂さんの声に応えてエルメロイⅡ世が宝具を開放する。

「これで逃げ切れ——」

「そんな訳ないだろう!!」

ランサーを弾き飛ばし、騎兵が追う。彼は己の腰に携えた、その袋を手に取った。

「——鏡像結界の袋!!」

それは内と外を入れ替える、かの逸話においてはゴルゴーンを破滅させしめた反転の宝具。

「何……!?!」

本来はペルセウスを足止めするための石兵八陣が、あろうことか僕らに対して牙をむいた。

「な、立ってられない……」

「ち、力が入りません……!?!」

相手に向かうはずだったデバフ効果が、僕らに降りかかる。遠坂さんもマッシュも足を折る。

宝具を返された……?!

『外と内を入れ替える概念の宝具だ!! ああもう、ペルセウスだって

んなら想定してしかるべきだったのに!!』

己の不手際だとダヴィンチが詫びる。

『彼は己の武力で名を馳せたわけじゃない。いや、もちろん一廉の實力はあるけど。英霊ペルセウスの強みは、その保有する宝具の数と質だ』

ペルセウスはその逸話において、数々の伝説的な武器を譲られたり、もしくは強奪するなりしている。メドゥーサ退治における不死殺しの鎌も、石化の魔眼を防いだ青銅鏡の盾も、そして今日の前で使われた、鏡像結界の袋も皆、一線級の宝具だ。

「とんだ初見殺しだ……」

エルメロイⅡ世が呻く。見れば、ランサーも膝に手をついている。ただでさえ出力で劣っているのにデバフ大量に逃走経路も断たれた。これ、もう——

「ほら、逃げられなかったろう？ これで終わりさ、カルデアのマスター」

その大鎌が翳される。不死殺しの異名を持つそれは、定命のものに對しても回復不能の傷を負わせるだろう。

「さよならだ、藤丸立花——」

死神が如く。致死の大鎌が僕の首に添えられて——

※

「ああもう、どうしよう。大変だ……!!」

「不味い、マシユもミス遠坂もエルメロイⅡ世もクー・フリーンも動けないし

「あのクソ探偵は頼りにならないし!!」

「何か、何か手は

「戦力が足りない

「でも、サーヴァントをこちらから送ってもあちら側に介入される

「——ん？」

「おい、待て



「待つてっば!!」

「どこに行こうというんだ」

「聞いてなかったのかい!？」

「こちらからサーヴァントを送っても契約に横やりを入れられる——」

「いや、それは」

「——確かに、君の事情なら、」

「いや、だが」

「——ちよ、待つて待つて!!」

「ああもう、その通りだよもう任せたぞ!!」

「レイシフトだ!! ミスタームニエル、慌ててないで、彼をマスターの下へ送り出してくれ!!」

※

首筋に添えられた大鎌が振るわれる、その、今はのちに、

——我が骨子は捻じ狂う——

ヒュン、と。空気が割ける音がした。

※

偽りの楽園に降り立った、新たなる英霊。

赤い外套を羽織り、本来よりも大きく見える背を向けて。白髪に褐色の肌の男。人理の守護者。己を掃除屋と卑下する無銘の英雄。皮肉交じりの言葉ばかり吐く、けれどその心に誰よりも——それこそこの英雄にも負けぬほどの——覚悟と理想を抱く人。

「え——」

「アーチャー!？」

僕が言うよりも先に遠坂さんが叫んだ。何だ、彼女、彼を知っているのか？

英霊エミヤは僕らには一瞥すら向けず、その双剣を握り直し、駆けた。

未だ土埃舞う中。彼の鷹の目は、僕らには見えなかった敵影を捉えたようだ。

瞬間、視界が晴れる。土煙を吹き払うようにして、その中からかの

騎兵が飛び出す。

言葉は無く。騎兵の大鎌は振るわれ、弓兵の双剣がそれを防ぐ。鏢迫り合い。戦場の中での空白で、その二人が初めてお互いを正しく認識した。

「衛宮ア!!」

その言葉に、どれほどの思いが込められていたのか。先ほどもどどこか相手を愚弄するような——そして本気でない言葉とは違う、彼の心が垣間見えるような咆哮。

二度三度と振るわれる大鎌は、精彩を欠いていた。ペルセウス——慎二の怒りが、その戦技を鈍らせていた。

一方の弓兵は、あくまでも冷静に冷徹に、その類まれなる心眼を以て騎兵の連撃を裁く。

逸らし、弾き、押さえつける。

双剣を交差させて上から大鎌の長柄を押さえつける。文字通りの攻め手を封じた騎兵の腹をエミヤが蹴りつけ、

「つか、は——」

くの字に折れるようにして、騎兵が吹き飛ばされる。

かろうじて受け身を取るも、膝をつく形となった騎兵。息を切らすこともなく、そこに立つ弓兵。

「——どうした慎二。ギリシャ神話に綴られる大英雄の力を得ても、その程度なのか？」

あくまでも涼し気に。彼らしい皮肉めいた言葉に、ペルセウスの目が血走った。

「デメエ、」

ペルセウスから立ち上る、莫大な魔力。真名開放の兆候だ。

「不死殺しの鎌よ——」

大鎌に禍々しき光が灯る。大振りの構え。そして必殺の構え。

瘦身を引き絞り、今、その致死の一閃が——

「——抉り斬る戦神の剣」

弓兵の右手より振りぬかれたのは、バゼットさんの宝具だったはずのもの。だが、エミヤのスペックを知る僕は知っている。彼の持つ宝

具の力だ。

挑発によつて相手の選択肢を絞り、手札の多い彼の宝具によつて的確に対処、迎撃する。

防御に秀でた双剣術とともに彼の十八番ともいえる戦術だ。

「!!」

隣で驚愕する教授を背後に弓兵がバックステップし、此方による。

「所詮はつたりだ、真名開放した本物には遠く及ばん。今のうちに撤退するぞ、マスター」

言つて、彼は僕を俵のように肩で担ぐ。

「ロード。あなた方のセーフハウスに」

「わ、わかった」

「ああもう!! 後でちゃんと説明しなさいよ、アーチャー!!」

「気が重いが……。了解だ、リン」

僕はエミヤに担がれ、エルメロイⅡ世とマシユは遠坂さんのマアンナに乗り込んだ。

「っ!? 先輩、ランサーさんは!?」

「えっ!?」

気付いたときには、すでに僕らは夜空に飛び立っていた。不味い、今の彼は瀕死に近い!!

「戻つてくれ、エミヤ!! ランサーがまだっ」

「ダメだ。ならん、マスター」

早くも離れ始めた地面を見やる。

そこには、復帰した騎兵。そしてそこに立ち向かう、青き槍兵。

「悪いな、坊主。俺はここまでだ。……業腹だが後はテメエに任せるさ、アーチャー」

戦士の別れに、それ以上はいらないのだと彼はただ背中であらためて語った。

「クソ。何がフラガラックだ……。真名開放されてなきや、ただの短剣じゃないか!!」

戦線に復帰したペルセウスにランサーが啜う。

「ハッ。そのブラフに引つかかったのはどこの阿呆だ? 目の前に見える阿保面がそうか?」

「……………ッ」

怒気を露に、騎兵が奔る。

「ハハハッ。分かりやすいなア!! いいぜ、相手してくれや。中身は未熟も未熟だが、その霊基は確かに大英雄のそれだ。……テメエがその霊基に見合うかどうか、確かめてやる」

そうしてランサーを一人残し、僕らは戦線を離脱した。

背後にがなる戦闘の音が、僕の後ろ髪をいつまでも引き続けた。

e p 8 敗走、そしてこれから

夜は、まだ続いていた。

かろうじて——そして、ランサーの犠牲により僕らはどうか、G Mサーヴァントであるペルセウスから逃げおおせていた。

場所は、ロードが用意したセーフハウスだ。何でもかつての第四次聖杯戦争の折りも、ここに拠点を構えていたらしい。

古い北欧風の、木造のログハウスに僕らはいた。

「まずは——ありがとう、エミヤ。おかげで助かったよ」

「いや、礼には及ばないさ」

僕の隣に侍る赤い外套の弓兵は、そう短く答えるにとどまった。

武装こそ解いているが、そこに隙は無い。どうやら目の前の二人を警戒しているらしい。

「エミヤ、楽にしているよ。彼らは味方なんだから」

「そうは言うがなマスター。やはり最低限の警戒は必要だ」

常在戦場、というわけでもないだろう。味方とそれ以外とで一線は引くという、彼らしいスタンスなのだろう。

「そんな弓兵の言う通りだ。……あくまで、私もミス遠坂も間桐桜に呼び出されたサーヴァント。彼女が正気に戻ればその時点で敵方に下らざるを得ん」

エルメロイⅡ世はエミヤの失礼ともいえる態度にそう理解を示して続けた。

「やはり君もマシユ嬢も優しく、そして甘い。厳しさはその弓兵が担当するのがいい」

——まあ、私の隣は納得していないようだがね。

理解を示したエルメロイⅡ世とは反対に、遠坂さんはむっつりとした表情のままだ。

「——おい色男。女性を宥めすかすのは得意だろう」

「む」

困り顔のエミヤに尚も頬を膨らませたままの遠坂さん。そして我関せずのエルメロイⅡ世。

気まずい沈黙に耐え切れず、マシユが声を上げた。

「えーっと、遠坂さんは、エミヤさんと面識があるんですか？」

「私、マスター。そいつ、サーヴァント」

なんで片言何だろう。

どこその部族みたいな口調の彼女に代わり、エミヤが溜め息とともに口を開いた。

「まあ、なんだ。今回の聖杯戦争においてリンに召喚されたサーヴァントが私だったというだけだ」

マスターとサーヴァント。いわば戦友という間柄か。とは言え、サーヴァントの特性上このエミヤと遠坂さんが召喚したサーヴァントは同一人格の別人なのだが。

「そうとも限らないわよ、藤丸君」

遠坂さんがエミヤを見つめながら続ける。

「あんた、記憶引き継いでるわよね？」

「そうなの？」

エミヤに問えば、彼は首肯した。

「そうだな……。そもそも人理が不安定な状態だったからか、ある程度ほかの召喚時の記憶もあるというのものもあるが。……この特異点に降り立った時、契約に横やりを入れられかけた。その際に『この特異点で召喚された私』のパーソナルデータが一部私の霊基に書き加えられている」

カルデアに召喚されたエミヤの霊基に、この世界のエミヤの記憶が書き加えられた、ということだろうか。だとしたら、

「大丈夫なの、それ？ 何か異常とか」

あるんじゃないかと続けようとして、カルデアからの通信が来た。

ダヴィンチちゃんだ。

『そこはモーマンタイだよ、マスター君。彼の霊基に異常は見られない。ほかのサーヴァントたちみたいに、契約に横やりが入れられたということもないしね。……ま、勝算はあったとはいえ、分の悪い賭けだったけど。ほんと、これつきりにしてくれよエミヤ』

「肝に銘じておこう」

頷く彼に、ダヴィンチちゃんは『わかつてるのかなあ』と半目を向けた。うん、いざというとき無茶するサーヴァントランキングトップ5のうちの一人なだけある。こういう時の彼の信頼はないも同然である。

「まあ、コイツが聖杯に横やり入れられないってのはその通りだと思うわよ」

遠坂さんは腕を組み、

「——何てったって『エミヤ』だものね？」

「ぐ」

そう、エミヤ——衛宮なのだ。

かつて炎上し荒廃する街を共に進んだとき、ぽつぽつと彼が語ってくれた。

曰く、英霊エミヤはその生前、マスターとして聖杯戦争に参加していたと。

そうと来れば、思い出されるのは、昼において僕らをもてなしてくれた赤銅色の髪の青年だ。髪の色も肌の色も、英霊エミヤと衛宮士郎ではまるで似ていないが、料理上手な一面も異常なまでに弓の腕が立つことも、言われてみれば確かに似通った点がいくつもある。

「……予想はしていたけどね。あんたの腕を移植されて、衛宮君が曲がりなりにも正気を保ててたのって、要はおんなじだったからってことなんだろうって」

かつての戦場を回顧しながら彼女は続けた。

「思えば、ランサーもいて。セイバーもライダーもこの世界に存在していた。見てないけど、たぶん柳洞寺にはキャスターもアサシンもいるはず。でもあんたはいなかった。この『桜にとって都合のいい世界』にとって必要なのは——いてはならないのは、間桐家の主と教会の神父。そして、アーチャーだったから」

間桐桜にとっての日常。彼女の思い描く幸せに、サーヴァントの存在は決して排除すべきものではなかった。真実、彼女のサーヴァントであるライダーとは本当の姉妹のように心を通わせていたのだから。

彼女の幸福に席がないものの一人は、やはり間桐家当主——間桐臓

硯。この人物は、いやでも彼女の昏い生い立ちを思い出させる故に。もう一人は、教会の神父——言峰綺礼。彼は、その傷を開くという性質、そして愛すべき先輩の大敵足り得る故に。

そしてもう一人は、実姉である遠坂凜のサーヴァント——アーチャーもしくは英霊エミヤ。彼は、その在り方が。愛する男の成れの果てを、彼女は許容できない故に。

「桜にとつての幸せは、衛宮士郎が幸せであること。衛宮君と平穏な日常を謳歌することこそが、桜の望み。だからこんな張りぼての世界を創ったつてのに、当の衛宮君の『戦場を渡り歩いた末の未来』なんて見せられたら、たまらないでしょ」

溜息を長く吐いて、遠坂さんは自身の妹の心情をそう推測した。そして、その推測は恐らく当たっているのだろう。

「この特異点における聖杯は分割されて各GMサーヴァントに管理されているようだが、その支配権は依然間桐桜が握っている。今はこの夢に沈んでいるのだろうが、無意識に彼女は私への介入を躊躇った。……この夢における私の配役に迷った、というところだろう」

『そんなわけで、エミヤくんの契約に介入されるまでにラグができた。その際にカルデアの方でプロテクトを掛けられたってわけさ』

今回は英霊エミヤだからこそ成立した対処かな、とダヴィンチちゃんは語った。ということとは、他のサーヴァントでは今後もカルデアからの応援は難しいってことか。勿論、アサシンエミヤも無理だろう。彼はエミヤであって衛宮士郎の可能性ではないのだから。

『そういうことさ。……ま、エミヤならもう一人いるんだけどね。ほら、彼は、さ？』  
「……うん、確かに」

もう一人の英霊エミヤ。黒い外套に刈り上げられた白髪。二丁拳銃を振るう、悪と混沌へと堕ちた衛宮士郎のもう一つの可能性。識別コードはエミヤ・オルタ。

新宿での一件では、彼は頼りになったわけだけど、今回においてはきつと噛み合わせが悪い。何より遠坂さんとの相性が。

『ああなつた彼を遠坂嬢に見せるのは酷だろうし。何より、これ以上



こちらからアクセスすれば、本格的に間桐桜を目覚めさせかねない」  
心情的にも戦術的にも非推奨というのが、我らが頭脳ダヴィンチ  
ちゃんの出した結論だった。

何はともあれ。

「これ以上のカルデアからの増援は難しいってわけか」

言えば、エルメロイⅡ世が領いた。

「今の段階では下策にすぎるな。与えられたカードで対処するほかな  
い」

「そうね。……個人的には、さつき言ってたもう一人のアーチャーつ  
てのには興味があるのだけど、いい加減これからの話をしましよ  
うか」

現状の確認と、これからの展望について。

スチャリとどこから取り出した眼鏡をかけて、遠坂さんが語る。

「こちらの戦力は、私とロード。そしてカルデア側からマシユと藤丸  
君、それにアーチャーね」

「一介の魔術師である藤丸君を戦力に数えるのはどうかと思うが」

エルメロイⅡ世が言えば、遠坂さんがこちらを見た。

「な、なんでしょう」

「そういえば、藤丸君がどこまでやれるのか、知らないなって」

曲がりなりにも世界を救ったマスターなんでしょ？ と首をかし  
げる遠坂さん。いや、そんな期待されても困る。

『うーん。残念だけど、藤丸君は魔術師としては素人といっている。  
本来彼はマスター適正だけで選ばれた、埋め合わせの一般人に過ぎな  
いんだ。その手の期待はするだけ無駄さ』

ハンズアップするダヴィンチちゃん。くう、真実だけどそれだけ傷  
つくなあ。

「うっわ一般人でもしかして士郎タイプ？ いや、アイツは何だかん  
だ魔術知識もあつたし強化も投影もできたし。……もしかしたら慎  
二以下？ それでよく世界救えたわねー」

「遠坂さんの評価が辛辣すぎる……」

「大丈夫です、先輩!! 先輩は頑張ってますよ!!」

フランスと励ましてくれるマシユはほんといい子だなあ。

「いや、そもそもサーヴァント同士の戦闘にマスターを戦力に数えることがナンセンスだと思うがね」

エミヤが苦笑いするが、しかし遠坂さんは平然と言ったのけた。

「あら。私だったら、キャスターくらいなら格闘戦で相手取るくらいならできるわよ」

「……………ああ、そうだな。君はそういう奴だったよ」

遠い目をするエミヤ。なんだ、いったい何を思い出しているのだろうか。

ともかく、マスター一人にサーヴァント四人というのは、数だけ見ればそう悲観することでもないのだけど。

「問題は、そのサーヴァントが揃いも揃って故障持ち、といったところか」

いつもより眉間に皺を寄せるエルメロイⅡ世が唸る。

確かに、現状マシユは正直戦線に出せるような状況ではない。あの決戦以降、彼女の中に眠るかの英霊は、その役割は終えたとばかりに眠りにについている。

「最初にバゼットさんに襲われたときは大丈夫だったんだけどね」

『あれについては、こちらの方でホームズが解析してたよ。まだ詳しくは分からないけど、君が出会ったっていう、イリヤスフィールを名乗る少女のお陰だろうってさ』

言われて思い出す。そういえば、彼女は僕に記憶と令呪を取り戻させただけじゃなく、何かしらの力も授けてくれたのだ。

この令呪の一面に特別の力を、だったか。

「イリヤは十年前の聖杯戦争で、小聖杯——大元の聖杯の端末になって消えてしまっている。……多分、大聖杯に残った残留思念か何かでしようね」

合わせる顔がないわね、と難しい顔をして遠坂さんが答える。

「マシユのあれは、あの一回限りなんだ。もうマシユには無理をさせられない」

「でもっ、先輩っ」

僕は首を振る。

「ダメだよ、マシユ。君に無理はさせられない。……特に宝具解放はダメだ。これだけは譲れない」

これだけは断固として。だって、あの時の奇跡を蔑ろにはできないから。

「なんだ、マスターとしては及第点ってところね」

ふふ、と笑う遠坂さんを少しにらむ。何さ、その生暖かい視線は。

「とすれば、戦力に数えられるサーヴァントは三人といったところか」

エミヤが言えば、いや、とエルメロイⅡ世が首を振った。

「私とミス遠坂も、戦力になるかと言われれば微妙だ。我々は霊基が安定していない」

「霊基が？ 出力の問題なら、カルデアの方である程度補助ができると思いますけど」

問えば、彼はやはり首を振る。

「残念だが、出力が安定しないのではないんだ。……霊基それ自体が揺らいでいるのだ」

「それって……」

『こちらで計測しているけど、確かに、霊基の存在強度が安定してないね……。そうか、サーヴァントの上に人格を上書きしているからか』  
「おそらくはその通りだろう。……私の場合は『諸葛孔明』という英霊の上に『エルメロイⅡ世』の人格が上書きされている状態だ。君らの言うデミ・サーヴァントとは逆の状態と言っている。簡単に言えば、重複した存在がコンフリクトを起こしているといえればいいか」

いや、全然簡単ではないですけども。

「ピンと来ていないか。……そうだな、簡単に言えばこの身体の主導権を握り切れていないのだ。本来の英霊の人格を無理やりに押さえつけて、我々の人格が存在しているからな。英霊側としては意識的にしろ無意識的にしろ霊基の主導権を取り返そうとしてくる。カルデアにいる私の方は、『諸葛孔明』と話がついているということだが、こちらの私はそうではない」

二つの人格が、どちらが表に出るかで衝突を起こしているわけか。

「そういうわけだ。本来の英霊側からすれば、勝手に自分の力を使われたくはないのだろう。……私の方は、比較的穏やかだからか宝具もスペック減ではあるが使える。だが」

「私の方は、全然ダメね。マアンナ呼び出すのが精いっぱいよ」

本当に腹立つわね、と遠坂さんが言う。けど、あの金星の女神を知っている身分としては、むしろよくマアンナ引っ張り出してこれてますね、と称賛を送りたい気分だ。

「つてことは、本来のスペックで戦えるのってエミヤだけってこと？」

「そうなるな」

難し気に頷く。これは確かに戦力不足が否めない。

「故に、だ」

エルメロイⅡ世は言葉をつづけた。

「戦力が欲しい。……たとえそれが、サーヴァントでなくとも」

「——サーヴァントではなくても……？」

当然の疑問に、マッシュだけでなく僕も首をひねる。

「そう」

エルメロイⅡ世は、煙草に火をつけ、そして迷うようにして言葉を吐いた。

「この世界に、居るはずなのだ。——私の教え子たちが、な」